

# 何かありそなアリゾナ紀行



Dec. 21 2008 ~ Jan. 03 2009

Seiji Suzuki

## 何かありそうな、アリゾナ紀行

アメリカ生活が丸四年になりました。来年は日本に帰るつもりですので、この冬のシャットダウンを利用して、バケーションをとり、これまで行ったことのなかった、アメリカの南西の地域をのんびり見てこようと計画しました。もちろん、自らハンドルを握る一人旅。せつかく行くからには、といささかながら、好奇心の虫をたたき起こし、こんなテーマで走り回ることになりました。

最終到達地は、San Diego

旅のテーマ

- (1) コースの途中にある天文台を訪ねること。

Socorra の電波望遠鏡 . . . . .ここは、いま一番遠くの銀河を探索しているところ。

Palomar天文台 . . . . .ここは、かつて、世界一の屈折望遠鏡のあった

Kitt Peak 天文台 . . . . .名実ともに、いま、世界の最先端をいく天文台

McDonld 天文台 . . . . .テキサス大学の天文台。

新しい屈折望遠鏡でユニークな観測をしている。

- (2) サボテンの荒野を走りぬける . . . . . メキシコとの国境沿いにはしりまくる。

- (3) White Sands に挑戦 . . . . .この砂が星形だから、確認して来いとの指令あり。

- (4) Big Bendの訪問 . . . . .テキサスの雄大さ、偉大さ。

- (5) Santa Fe Trail 走破

- (6) アメリカ最南西端到達 . . . . . Cabrillio National Monument まで。

そして、太平洋の空気を吸って、日本に思いを馳せること



これが今回走ったルート 5,651miles

## 旅の行程

				走った距離
一日目	Dec. 21	Lincoln Dodge City		394 miles
二日目	Dec. 22	Dodge City Santa Fe	Fort Union	446
三日目	Dec.23	Santa Fe Socorro	UFO Mus.	383
四日目	Dec.24	Socorro Globe	Socorro Obs.	360
五日目	Dec.25	Globe Hemet		460
六日目	Dec.26	Hemet El centre		305
七日目	Dec.27	El Centre Tucson		497
八日目	Dec.28	Tucson Douglas		243
九日目	Dec.29	Douglas El Paso		397
十日目	Dec.30	El Paso Fort Stockton		450
十一日目	Dec.31	Fort Stockton Fort Stockton		443
十二日目	Jan.01	Fort Stockton San Angelo		417
十三日目	Jan.02	San Angelo El Reno		402
十四日目	Jan.03	El Reno Lincoln		454
合計				5,651

## 何かありそなアリゾナ紀行 一日目 Dec. 21

### Lincoln to Dodge City

このところの寒波襲来でネブラスカは、華氏で零度近く。それでも、心配された雪はなく、昨晚の疲れからか、寝坊をしましたが、予定通り八時に出発ができた。しかし、外気温はマイナス 20℃。リンカーンから気温の上昇を期待して南下をするか、それとも、道路の整備のよいインターステーツを走って西に向かうか迷ったところですが、結局後者を取り、York まわりで、Kansas の Salina という町に向かうことにした。実は、これが正解で



雪道もこれだけ綺麗に整備されていた

した。とにかくアメリカの高速道路がよく整備されていることといたら、説明の仕様がないくらいよく行き届いているのです。気温が、マイナス 10℃以下でも、道路が完全に除雪されていて、いつもの速度 75 マイルで走ることができるのです。時たま、インターステーツを走っているときに、この道路整備の車を追い越したのだが、これがなんと、まるで道路の上の雪を掃き清めているかのごとく、ブラシでこすっている。

だから、道路わきには、20 インチくらい雪

が積もっていても、道路は、しっかりと舗装したコンクリートが顔を出している。これなら、安心して、スピードが出せるというわけ。

でも、私は、スリップを何度も経験しているので、やっぱり怖い。というわけで、一人のろのろ運転。いかにも年寄りという感じのスピード。ピックアップトラックがこれ見よがしにと追い越してゆく。でも、安全第一で、今日は我慢。

カンザスに入ると、例により急に道路事情がよくなる。まるで、雲の上を走っているように揺れがない。外気温も少しずつあがってきている。

81 号線がカンザスでは、インターステーツ 135 に変わる。Salina という町まで来ると、両側の草原には雪が積もっているが、道路の状態はすこぶる良好。これなら、何とか無事、極寒の地から抜け出せそう。



McPherson で見た製油所

Dodge City に行くには、いろいろなルートが考えられるが、今回は、McPherson という町

から 56 号線を走ることにした。この町には **College** までであるということで、どんな町なのか興味のあるところ。それが、ここを走ってみてすぐにわかった。この町をちょっと走り抜けると、両脇の草原には、オイルの掘削ポンプがあちこちに、しかも、せわしく、動いている。ここは、カンザスの石油の産地でなのである。しかも、ご立派、製油所まである。それだけ、ここで石油がたくさん出るといこと。その恩恵をすぐに味わうことができた。なんと、こここのガソリンの価格がネブラスカより、ガロンにして 10 セント安い。流石と、脱帽。とにかく、ネブラスカでは、この石油掘削のポンプは皆無といってよいほど。わずか、百マイルくらいしか離れていないのに、なんで、ネブラスカに石油が出ないのか、少し悔しい気がしないでもない。

このあたりから、雪はいよいよ少なくなり、外気温もマイナス数度となっている。このままで来れば、今日は、スリッパの心配はない。



これが **Pawnee Rock** だ

**Pawnee Rock** という町に、**National Historic Site** があるということで、これを探す。たまたま立ち寄った **Historic Marker** に、この **Pawnee Rock** というのが、**Santa Fe Trail** の重要な地点であるということが紹介されていた。ここがなんと、ミズーリからニューメキシコまでのこのトレイルの中間地点であるとか。カンザスの大草原を旅する人たちの道標になっていたとの説明。これは、見逃すわけにはいか

ない。早速、ナビで探す。運よく、すぐに案内がでた。のはいいが、これがまた、今まで来た道に戻れば何のことはなかったのだが、少し行過ぎていたために、とんでもない田舎道をガイドしてくれた。すこし雪の残る未舗装の道路をこわごわの運転となる。そんなことまで経験したのだから、何とか、その **Pawnee Rock** までたどり着かなくては。ということで見つけたこの道標。トレイルの脇にある小高い丘。これが岩でできているところに意味があるのかもしれない。標高はたいしたことはないが、それでも、この丘に行けば、カンザスの大平原の眺望が開けていた。なるほど、この眺望をみれば、ミズーリからここまで来た人は、やっどここまで来たか。もう、後戻りはできない。故郷には帰るまい、の気持ちになったに違いない。とにかく、このカンザスのだだっぴろさにはまさに脱帽なのだ。

ここから、今度は少し南に行ったところに、**Fort Larned** という砦がある。1851 年にできたというから、あの、ルイスとクラークがミズーリ川遡り、周辺のインディアンたちと友好の絆をつないでいったときから、わずか数十年しかたっていない。**Santa Fe** トレイル

を旅する人たちの身の安全を確保するためにできた砦だ。こうした、歴史のある遺産は、連邦政府の保護により、National Historic Site として、保管・管理されている。ここにも、



#### Fort Larned の遠景

南部シャイアン、アラパホ、カイオア、そして、コマンチなどのインディアンと西洋人のとの諍いの解決に尽力したクラークのことを思い出す。彼は、こうした諍いでは、いつもインディアンの言い分に理解を示し、結局、西洋人に反感をかうことになり、その職を追われることになったのだが、こんなクラークの生き方に、少なからず男粹を感じている小生としては、やや、複雑な思いがしないでもない。

この Fort Larned に行く途中に、ふと見つけたのが、Santa Fe Trail の Visitor Center。これはラッキー。何しろ今回、このルートを走るのは、この Santa Fe Trail をトレースしようという意味があったからだ。二日目の宿を Santa Fe としたのも、その意味からである。この Santa Fe Trail は、もちろん、フロンティア時代、沢山の西洋人がコロラドで発見された金を目指しゴールド・ラッシュで苦難の旅をした街道。1820 年から 1880 年まで、ここが、ミズーリの Independence と、メキシコとアメリカの戦争によりアメリカの土地となった Santa Fe との間で、年間に数百万ドルの金が動いたというから、これはとても重要な街道であったわけだ。家財道具一切をつんで、黄金を掘り当てることを夢見見ながら、ここをどれだけ沢山の幌馬車が通っていったことだろう。やがて、この街道筋には鉄道が引かれることになる(1880)。この鉄道こそ、テキサスやニューメキシコからカウボーイたちが連れてきた牛を東部の大消費地に運んだもので、それは、今でも大陸を横断するまで拡張され、アメリカの大量貨物輸送のルートとして大活躍しているのだ。このビジターセンターの中はミュージアムになっているが、時間がなくて入ることができず、お土産だけ購入。これがまた、安かったんです。どこに行ってもそうだが、こうした Visitor Center などに並んでいるみやげ物が、ガソリンスタンドやトラックステーションなど、ほかのところでも販売されているのだが、そうしたところよりも安いことがある。観光地に行くと、それだけで値段を倍近く跳ね上げているどこかの欲の面の張った国とは、似ても似つかぬこの

ナショナル・パーク・レンジャーが常駐していて、中にはいると、懇切丁寧にその歴史の講義をしてくれる。彼らは、こうした歴史の遺産について、学術的な勉強をしているのである。そして、自分の研究の成果をキチンと本に纏め上げ、それを出版しているから、流石である。

それにしても、こうした砦が、インディアンたちから、西洋人を守るために作られたものと聞くにつけ、あの、「ルイスとクラークの探検」のあと、この地の総統治官となり、この辺りを居留地していた、

現実。来る人は、せっかく足を運んで来てくれたのだから、せめてその御礼にと、こんな風に気持ちよくみやげ物を買ってもら、そんな気持ちにならないだろうか。聞かせてあげたい話だ。

まあ、とにかく、この日の宿 Dodge City に無事ついてよかったと胸をなでおろした一日でした。おかげでずいぶん、肩が懲りました。



懐かしの Dodge City 昔のタウンを再現したもの。  
Museum になっている。

この日の行程

Lincoln → York → Belleville → Salina → McPherson → Great Bend →  
Larned → Kinsley → Dodge City

走った距離は、394 miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 二日目 Dec. 22

### Dodge City to Santa Fe

Dodge City の夜明けはやっぱり少し遅い。なにしろ、ここは、カンザスの西のはずれに近い。そんなわけで、ゆっくりのつもりの朝が、まだ暗いうちの出発となった。ここからは、前に走ったことのある、56 号線を前回とは逆に南に下る。しばらくいくと、前回のものすごい印象がよみがえる。Montezuma の風車の大群だ。とにかく、広い大農場のなかに、何百基という風車が、悠然とぐるぐる回っているのである。風のある限り、絶え間なく。ただ、不思議なことは、この風車の向きが南東を向いていること。つまり、ここは偏西風よりもメキシコ湾から吹き上げてくる風を頼りにしているのだ。それにしても、海風がここまで、来るとは、これまた、興味の尽きないところだ。

しばらくいくと、これまた懐かしい牛の大群。これがまたすごい。この時期、草原は枯れて黄色くなっているのだが、そんな中に丘全部が黒くなっているところがある。これ全部牛だ。数を数えようにも、目が行き届かないから不可能。まあ、数え切れない数の表現を無量大数なんていうのがあったような気がする。そんな光景だ。写真を撮ろうと窓をあけたが、これが、糞尿の臭いがすごくて窓を開けていられない。風車と牛に仰天の出発となった。



Montezuma の風車、その数に圧倒される



Cimarron の Grass Land どうですこの広さ

ドッジシティからは、かつてのサンタフェトレイルに沿って走る。そのトレイルに平行してサンタ・フェ鉄道が走っている。かつては、テキサスからカウボーイが追いかけて、運んできた牛をカンザスまで運んでいたものだ。いまでは、牛よりも穀物の運搬が主要のようだ。その穀物サイロのあるところに小さな町ができています。小さな町ではあるが、大農場にとってはどうしても必要な施設。Hugoton などそんな

風にしてできた町なのであろう。大草原のなかに数百人足らずの町がポツンポツンとあるのだ。この町あたりから西は、今度は、穀物畑ではなく、まったくの草原。Cimarron Grassland と呼ばれているまったくの草原。とにかく、草だけの大平原、どこまでも続く荒野。こんなところを幌馬車で走っていても、いったいどちらが西なのか、南なのかわからない。

そんな草原のなかを走っていたら、どうも前方の空がぼんやりとしてきている。場所によっては、雨雲の筋のようになっているところもある。朝からどんよりとした雲に覆われていたが、この先雨になるかと覚悟。ところが、その雲らしきところに雨らしきものはない。なんと、なんと、これは実は、土ぼこりだったのだ。近づくと、ものすごい量で、前はもやがかかっているように見えない。ところが、風の筋を通り抜けるとこれがまったくそのように晴れている。まったく何かあるかわからないのが、この



国の大きさ。その驚きがまだ続く。

#### Rabbit Ear Mtn. あたりか。

カンザスの南西の端の町が

Elkhart。ここを過ぎると、サンタ

フェトレイルは、オクラホマに入る。しばらく走っていたら、今度は急に道路をなにかが横切った。あわててブレーキを踏む。しかし、どうも、動物のようではない。これはいったい何かと思っていたら、こんどは次々に猛スピードで走っている私の車の前を集団で横切っている。ブレーキを踏んだり、ハンドルを切ったりして最初はよけていたが、これが、実は、風で飛ばされた枯れ草なのだ。そうです。あの西部劇でよく見る、風とともに町を走り抜けてゆく、あの草玉だったのです。それがわかると、今度は、こちらもカウボーイの気分で、うまくよけたときには、つつい口笛がでる。ところが、最初はマカロニウェスタンの気分だね、なんて悠長なことを言っていたが、とんでもない。そのうち、これが大群でやってくる。こちらは65マイルで走っている。その前をひっきりなしに横断するのだ。もう、よけるなんてものではない。ブレーキは後続の車に危険。仕方なくこの草玉に車ごと体当たりの状態。当たると草玉ははじけ、そのまま車のしたにもぐるが、それは上出来。悪いのになると、砕け散った草がフロントガラスに襲い掛かる。一瞬、目をつぶってしまう。なかにはバンパーに引っかかって落ちないものまである。しばらく、この草を抱いた状態で走っていたが、そのままにしておくわけにもいかず、車から降りてとろうとしたが、今度はなんと、風の圧力でドアが開かないのである。恐れ入りました。この風の

威力、でした。

地図でみると、このあたり、ピストルの銃身のようにオクラホマが延びている。なんで、こんな境界線ができたかとおもうほどだが、ここがまったくの草原地帯なのに、なぜか石油が出るのだ。その利権が絡んで、こんな形になっているのではと憶測する。そんなことを想像させるに十分なほど、ここにある小さな町、Boise City には、立派なコートハウスがあり、ここに東西南北のみならず、北東から南西に伸びるハイウェイも交差しているのだ。



この町を過ぎると今度は、Rita Blanca という National Grassland

ロッキーに連なる山が出てきた。

が広がっている。このあたりからニューメキシコにかけての荒野で、オクラホマの荒野と違い、起伏に富んでいる。この変化がなんともいえない。急に開けるバレーのようなところ、そして、今度は遠くに山がちらほら見え出してきた。サンタフェトレイルの立派なランドマークである。地図でみると、標高が 8800ft とあるから、立派な山だ。今にもインディアンが出てきそうな丘陵地、そして大荒野、遠くに平野を見下ろす悠然たる山々を見て、インターステーツ 25 に到着。心配した雪の障害もなく、とうとうニューメキシコに入る。そして、この日の目的地、Fort Union へ。



**Fort Union National Monument.**

この Fort Union は、二つあるサンタフェトレイルが合流する地点にあり、このトレイルを利用する旅人の警護のために作られたもの。解説書には、ここは、その土ぼこりがひどく、数多くある砦のなかでも、もっともご婦人たちに嫌われていたところだと書かれている。確かに、この日も、風が強く、帽子を何度も飛ばされた。その風の強さと、周りに木がないことが、嫌われた原因のようだ。砦は、それを象徴するかのよう土で作られていた。建物は今はないが、その土台、

壁が残っており、これがまたすぎましいのである。その建物の土台を一巡りするツアーがあるが、これが、歩いてまわるだけで、有に一時間以上かかりそう。というわけで、私は、そのごくごく一部を見学して回った。あまりにも広いのと、風が冷たいので、途中で引き返した。何度か、ツアーのトレイルを短絡して、草原のなかを歩こうとしたが、そこには、なんと、ラトルスネークに注意の看板が。



これが、陸の孤島といわれた **Fort Union** の跡

この冬にラトルスネークは出ないだろうが、それでも、この注意書きは、見ただけでもぞっとする。というわけで、結局、30分も歩きまわる羽目になった。ちょっと歩いただけだが、それがなんとなく息苦しい。調べたらここは、標高 600ft とある。そうなのだ、ここは、ロッキー山脈のふもとであることを忘れていた。

サンタ・フェの町は、もうメキシコそのもの。びっくりしたのは、ものすごい車の量。それもそのはず、ここは、ニューメキシコの州都でもあった。しかも、町なか、二車線の



信号なしの交差点でいったん停止の看板だけで走っている。この標識のときには、交差点の前で止まった順に左回りに優先して進行してよいことになっているが、二車線もあると、どの車が優先であるのか分からない。まあ、いいや、隣の車と一緒にゆけ、といった状態で走った。がしかし、よくもまあ事故が起こらないものだ。

これ、これ、正真正銘 **Saint Fe Trail** するのかも知らず。

とうとう、**Santa Fe** に来たぞ。その快い気持ちでこの日はぐっすりと眠りにつくことができた。次の日、どれだけ恐ろしい思いを

この日の行程

Dodge City → Sublette → Elkhart → Boise City → Clayton  
→ Springer → Ft. Union → Las Vegas → Santa Fe

走った距離は、446 miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 三日目 Dec. 23

### Santa Fe to Socorro

じょ、冗談じゃない。なんと、このドライブ旅行で一番心配していたのが、ここサンタフェの雪。とにかく、山岳地帯で冬にはよく雪が降る町だ。何しろ標高が 2000 メートルもあるのだから、日本で言えば、長野あたりに相当するのだろうか。うれしくないことにその心配が的中というわけ。朝まで、1~3 インチ程度という予測なので、まあ、その程度ならと安心していたら、なんと、数インチの積雪。しかも、朝、まだ吹雪いているのである。



こんなときには、あわてても仕様がな  
腹を据えて、とにかく安全運転。

当初、サンタフェからアルバカーキに向か  
う予定であった。しかし、アルバカーキは

参りました。この雪。腹をくくる。

サンタフェよりも西にあり、天気予報では西の方ほど雪だ。アルバカーキからは 40 号線を東に走るつもりでいたが、このハイウェイとはあまり相性がよくないので、思い切り、近道をして、サンタフェから一旦インターステーツを北に走り、そこから、南に一揆に走っている 285 を Clines Corner に向かうことにした。とにかくゆっくりでも、走っていればかなりの時間短縮になるはずだ。

ホテルをでて、サンタフェの町を、雪道走行。ほかの車もゆっくりなので心配は要らないが、とにかく、タイヤが時々スリップする。しばらくして、すぐ隣のちょっと前を走っていた車が、嫌に近づいてくる。こちらが注意していたからよいものをこの車、自分が滑ったついでに、斜線を変更し始めたのだ。あわててクラクションを鳴らし、危険を喚起。危ういところで二台でこすりあいをするところだった。とにかく、事故を起こしても、事故に巻き込まれても旅を続けることはできない。冷や汗をかいた一瞬である。そして、ようやくインターステーツにのるが、北に向かう車は少ない。少ないのが安全なのか、ほかの車が走っているのが安全なのか、難しいところだが、雪が降るときには前の車に先導してもらうに限る。どんなに遅い車でもそのほうが安全、気が楽なのだ。

しばらく走っていたら、前の車に追いついた。安全のためには、25 マイルで、とにかく、前の車のわだちのあとを走るしかない。その轍からちょっとそれれば、そのまま路肩に入り込んでしまう。こちらでは、高速道路にガードレールがないから、ここでとまるというものはない。路肩を滑り落ちたら、自力ではあがってこられないから、そうなったらもう打つ手がない。そんなことを考えながらの運転。とにかく、両腕に力を入れてハンドルを



こうなれば、こちらのもの。

前の車の轍が新雪で覆われてしまう。こうなると、一人雪道を走るのはかなわない。そんなことが気になり、どうすればいいんだと考えていたら、なんと、前にいたトラック二台が先導してくれているのではないか。これには助かる。とにかく、新雪を固めてくれるし、轍はしっかり作ってくれるし、これほど、すばらしい先導役はない。こうして、心配して

いたローカルハイウェイも無事はしり抜けることができた。インターステーツがかなり山の高いところを走っていると見えて、ローカルハイウェイは、山道を下る一方という感じ。だんだん雪の量が少なくなっていくのがわかる。轍がしっかりと黒くなってくれば、雪はもう積もってはいない。こうなると、40 マイルでも大丈夫だ。そんな気の緩みが事故につながってはいけないと、ここも、路面の状態に細心の注意。こうし



この違い。Unbelievable。これがアメリカ

て何とかインターステーツとの交流点 Clines Corner までくる。と、なんと、Clines Corner では雪が消えている。こうなればしめたもの。さあ、いよいよ、また、快適ドライブの始まり。

ここからは、大草原が始まる。地図にはわき道さえも乗っていない。とにかく、地平線まで、草原以外何もない。電線柱もないのだ。わずかに灌木があるが、ただ、ひたすら草原が地の果てまで続いているといったほうがいだろう。

握り、前の車を凝視。曇ってあまりよく見えないのはめがねの性でもあるし、雪のせいでもある。読み見えない上に凝視をするから、しばらくしていると肩がこってくるのがわかる。でも、緊張を緩めるわけには行かない。

およそ、10 マイルほど、インターステーツで緊張しっ放し。そのあと、ローカルのハイウェイに入るが、ここは、インターステーツと違い、車の量が少ない。これだと、

そんな地形だから、風をさえぎるものがない。まったくこの風はどこから吹いてくるのかと、いきり立ちたいほど、風がすごい。車のドアが開かないのだ。草原のはるかかなたに



**Roswell の City house**

かすみがかかったようになってい  
る。よく、雨雲のしたに垂れ下がる  
雨の筋のような感じだ。それにし  
ても日が差して、雲は雨雲でないの  
に、あのあたり、どうなっているの  
か、と思っていると、その場所が  
近づいて初めてその理由がわかっ  
た。砂埃なのである。草もまばら  
に生えている程度だから、このもの  
すごい風で土が舞い上がっている  
のである。それが、まるで、雨が  
降っているかのごとく、そのあた  
りに霞をかけているのである。

ハイウェイを走っていると、時々、ランチの標識が立っているが、その奥どこまで行けば、その牧場があるのだろうか。牧場と書いてあっても、牛さえ見当たらない。牧場の境界に作られた鉄条網の柵が、これまた、どこまでも直線で大草原のかなたまで続いている。たぶん、ここから数マイルはいかないと牧場にはたどり着かないのではなかろうか。

そんな大草原に、まるで、そこに湖があるかのように雲の陰が落ちている。ちょうど巨大なキャンバスに、巨大な地上絵のように雲の形を描いた感じ。その壮大なこと。これまた楽しい。

## **UFO 博物館を訪問。**

こうして訪れた UFO 博物館。  
Roswell という町にある。この町、  
UFO が出現するということで世界的にも有名な町。そこの博物館には、それらしきものがたくさん展示されている。しかし、それが確認できないから、UFO なのであり、また、



**なんてたって、世界一。UFO 博物館**

UFO であるだけに、確かな情報が少ない。UFO を収めた写真もちろんあるが、これとて、実際は何かはわからない。とにかく UFO なのだ。こうした写真を見ていると、だんだんそれらしく見えてくるのであるから、これも不思議な話である。というわけで、ついつい、UFO にちなんだ土産物を買ってしまおうというわけ。

この博物館に入ると、どこから来たのか、世界地図と、アメリカの地図に自分のピンを指すことになっている。日本からも、この辺地に来た人がいた。数えてみたら、私で八人目であった。よほどの変わりものと見える。



火災防止を呼びかける Smokey Bear

Roswell から今度は西に向かう。朝の雪道の苦労がまるでうそのように、青空が広がっているが、相変わらず風がものすごい。ハイウェイ 70 を西に走ると、リンカーンという町につく。懐かしい名前だ。ここに State Museum がある。なんと紹介されているのが、アパッチインディアンの文化だそうだ、このあたりがアパッチの活躍したところなのかと納得。いよいよ南部に来たという実感が湧いてきた。

Capitan では、Smoky Bear がやたらと目についた。これは、マスコットに熊を使い、森林火災、とりわけタバコなどの人災による火事防止を呼びかけている。モンタナでも、ワシントンでもよくこの看板を目にした。ここも、National Forest になっているのである。これだけ大平原が広がっているにもかかわらず森林がわずかしてない。その森林を大事にしなくては、という山火事防止の見張り人なのである。

実は、後で気が着いたのだが、ここでルート 70 から離れてルート 380 を走った。こここそ、例のアメリカの原爆の実験をした場所 Trinity から、わずか 20 マイルくらいしか離れていない。そんなことを知らないものだから、何の気なしに通るぬけ、こと



Route 380 で。

の重大さを見過ごしてしまった。自分のいる場所の情報は事前にちゃんと確保しておくべきだとつくづく反省したしだい。

そして、**Socorro** という町に着き、ここに一泊することにしたが、なんと、この町の中を流れているのが、南の **El Paso** に行き、そこからメキシコとの国境を流れる川、**Rio Grande** になっていようとは、思いもよらなかった。

この日の行程

Santa Fe → Clines Corners → Encino → Vaughn → Roswell →

Hondo → Capitan → Carrizozo → San Antonio → Socorro

走った距離は、383 マイルでした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 四日目 Dec. 24

### Socorro to Globe

今日と明日は、ナショナルホリデー。とにかくどこに行っても休みですから、この両日はただ、移動だけ。それでもコースにあるめぼしいところには立ち寄ろう。もし、そこがオープンしていれば、これは、日ごろの行いがよいからに他ならない。そんな気持ちのドライブです。

地図で、コースの途中に電波望遠鏡の施設があるということで、何の気なしにここに行こうと考えていた。その後、北のほうにある National Park にいく予定だったが、ここがどうも雪になっている可能性がある。なら、そうあわてることはない。この天文台をじっくり見てこようと考えを変えた。



Socorro からの 60 号線は、丘を登るようにすこし山道を走るが、その斜面を登りきるとここにまた、どうしてこうなっているのと思うような平原が続いている。ここが牧場なら、あの山の麓まで、牧場ということになる。数マイルはあるのではなかろうか。ついつい、「僕、じょうしょう。」なんていう駄洒落がでる。快調、快調。

これが VLA だ。やったぜ。

そろそろ目的の VLA( Very Large Array )はこのあたり。ハイウェイ 52 号

線に入ると案内にあるが、それがなかなか出てこない。が、なんと、この大平原のなかに、かすかに空に向けて、なにやら手を指しのべているような白い鉄塔が見える。その姿から、これが直ぐに電波望遠鏡のパラボラであることが分かった。うれしいね。とうとうきました。とにかく、ニューメキシコの観光スポットになるほどの天文台だ。日本からわざわざこんなド田舎まで来るような人はまずいないであろう。何とか、中に入ることができればと願いながら、アクセス道路に入った。

やはり、休みのようだ。が、ビジターセンターは無人で開いた。ほかに訪問者はいない。というより、ここに働いている人も、明日はクリスマスだから、休みにしているのだろう。ただ、車は、作業員だが、かなりの数が止まっていた。どうも、メンテの人たちが働いているようだ。

電波望遠鏡は、ひとつの電波望遠鏡だけで観測するのではなく、何基も離れて設置し、

それぞれが観測したデータをコンピューターで処理し、あたかも、一台で観測したような処理をし、天体を研究しているのである。どれだけ離れて設置してあるかが勝負。

ここは何がすごいかって、とにかく、どでかい。線路が敷かれており、これで巨大な望遠鏡をこのバレーの精一杯広げて移動するのである。パンフレットによれば、ここには、直径が 82-foot, 24 メートル、重さはなんと、230 ton のアンテナ 27 基が、Y の字型に配列されて、宇宙からの電波を捉えているのである。日本の野辺山にも直系が 45 メートルの電波望遠鏡が設置されているが、これは単独の望遠鏡。このものは、27 基ができるだけ離れて一斉に宇宙の決まった点を観測しているのだ。



ハイウェイと交差しているアンテナを運ぶ線路。

つまり、その配置の広がり電波望遠鏡の大きさになるわけ。ということは、直径が数マイルの電波望遠鏡と言ってもいいのだ。そんな望遠鏡を使った観測は、ここがまさに世界一。というより、今、天文の世界でもっとも進んだ観測、つまり、宇宙の一番遠いところを覗いて観測しているのが、この Socorro の VLA 望遠鏡と言われている。言い方を変えれば、ビッグバンが始まったときの状況はここでしか見ることができないのだ。まったくアメリカのやることは度が桁外れ。「参った」と頭が下がるよ。



これでひとつの牧場ってところかな。

この大平原は Plains of San Agustin という名前がついているバレー。これがまた、見事に延々と広がっている。その一角に VLA があるわけだ。アリゾナに入るハイウェイ 60 は幹線の道路であるが、少し、田舎を走ろうということで、途中から 12 号線に入る。このハイウェイがバレーの西にある山の麓を走っているので、走りながらバレー全体を眺め、楽しむことができる。贅沢と思うほど、展望が開け

ている。そして、この辺り走っていると、町の名前、山の名前、森の名前、いたるところに Apache という名前が出てくる。精悍で、闘争心が強く、最後の最後まで騎兵隊と戦った勇敢な部族がこの辺りを本拠地にして、テキサスからアリゾナまでを支配していたのだ。ニューメキシコ、つまり、山脈の東側を走っていたときには心配した積雪もなく、快調そのもの。

ところが、Horse Spring を過ぎ、Aragon という町に入る辺りから、雪の量が増えだした。これまで走ってきたコースから考えると、ニューメキシコの方が標高は高いはずなのに、アリゾナとの州境になっているこのあたり、やたらと雪が目につく。つまり、ここが、分水嶺になっていて、その西側に雪が降り積もるのである。雲の流れる方向に支配されて、標高が高なくても、雪の量が多いというわけ。でも、アリゾナに入れば、きっと暖かいはずだから雪は大丈夫だろうとたかをくくる。先入観とは恐ろしいもの。



雪との格闘、まだ続いています。

どこに行っても雪、雪、雪。つまり、ここはアリゾナの高地、標高が高いのだ。そんな山の中にある Eagar の町はインターステーツ 40 からインターステーツ 10 号に、州境に添って抜けるハイウェイ 191 号線の交通の要衝。なかなかにぎやかな町。そして、この町を走っているときに目についた標識が White Mountain。いったい、何かと思ったら、ようは雪山のこと。たぶんここから見たら一年中に雪をかぶっている山なのだ。近くにある Baldy Peak という山は、11403Ft ある。その山の頂は、見事に雪が照り輝いている。ひょっとして、俺はその山を越えなければならないのか、そんな心配が頭をよぎる。これから行こうという田舎ハイウェイ 260 号はそちらに伸びているか

アリゾナに入ると最初の町が Alpine, 町。その名前からしていかにも雪がありそうだ。ここにはウィンタースポーツをする人たちが集まるのであろう。山の中のちいさな町だが、モーテルなども沢山あり、気軽にきて、雪山を存分に楽しんでかえることができるようだ。おそらくフェニックスあたりからでも来るのではなかろうか。

アリゾナに入れば、のとんだ思惑違い。もう、北に走っても、西に向かっても、



らだ。それは、心配だけではなく、現実となった。ここから、周りが雪国そのものの道をはしる。路肩は凍結している。でも除雪がしっかりしている。南の国の除雪はどの程度かと心配ではあったが、ここは信頼して、というより、そうするより仕方がなかったのだが。でも、やはり生活道路の整備は南国とは言ってもしっかりとできていたようだ。そのおかげでおお助かり。途中、ものすごい雪原になっている場所を通過したが、ここには、トラックでのりつけ雪遊びをしている人たちが大はしゃぎで遊んでいた。なかには、トラック



もう、雪がすきなんです。行き過ぎです。

に雪を積み込んでいるものもいる。こちらの気苦労も知らないで、みんな、とにかく雪が楽しそう。でも、何とか、怖い思いをすることなく、無事、この雪山をぬけでることができた。目的の **Fort Apache** に行くには、さらに田舎道となるが、標高もかなり下がってきているようで、なんとか **Fort Apache** にたどり着く。ここは、その名前から、立ち寄ることに固執した町。すでにかなり時間が遅くなっていたが、なんと、ここの **Museum** が客

もいないのに開いているではないか。これはラッキー。やはり来た甲斐があったというもの。なかに入ると、この辺りのインディアンの生活が紹介されていた。こちらは、バッファローの毛皮で作ったテピーではなく、木の小枝をかき集めて作った小屋で生活していたようだ。モデルの小屋に入ると、そこでインディアンの伝説の話が紹介されていた。アバッチに伝わる **Creation**、つまり彼らの先祖がどのようにして生まれたかという話である。それは、**Medicine man** という呪術者のような人が語り伝えたもので、それに寄れば、

人間は、すなわち、彼らの先祖は、男も女も最初は、創造の神により土から創られた。この世の中は、最初は暗闇で真っ暗だったが、その創造の神は、東に赤、南にブルー、西に黄色、そして、北に白い色の光を作った。すると、それぞれの方角からそれぞれの色をした蜘蛛が出てきて糸をつむぎ、その糸により地球が丸くなった。こうしてできた地球を私たちは守らなければならない、というような内容だったと思う。似たような話は、私が翻訳しているアメリカ中のインディアンの昔話のなかにもあったような気がする。話の結末は、いつも、インディアンは平和を愛しているというものである。彼らは、自然とともに行き、



インディアン達の小屋。Fort Apache で

動物たちを自分たちの仲間と考え、いつも、平和で楽しい世の中を保つことに努力しているということに誇りを持ち、それを、子孫に語り伝えているのである。その純真さ、自然



**Salt River Canyon**

たり、Fort Apache インディアンのリザーベーション地域となつてはいるが、山の中なのどこからどこに移動していく人たちのだろうと、余分な詮索をする。と行く手の山間が狭くなっていくではないか。地図を見れば Salt River Canyon とある。なるほど、ここが名所なのか、と最初はその景色に有頂天になっていた。ところが、実は、ハイウェイが川を渡るのだ。こちらはインターステーツ以外は、大体道路は自然の土地をそのまま残して、ここに道路を作る。大きな橋やトンネルなどほとんどない。だから、山の形のまま、崖っぺちに道路を作ってしまうのだ。というわけで、ここが名所になるほど、これがまたひどい崖道ののぼりくだり。何の気なしにみた



**折り重なるような崖道**

崖の反対側の山をものすごい傾斜で登っていき車があるから、川の向こうにも

ひどいハイウェイがあるのか、よくもあんなところを走るなあと思っていた。あそこを走るのは少し度胸がいるよ、などと感心していたが、それが、それが、実は自分の走っている道の行く先だった。こちらのこうした山岳ハイウェイにはガードレールのないところもある。もちろん脱輪したら、そのまま、谷底だ。数十メートル、あるいは、もっと高いところでは、百メートル以上あるのではないか。自分の行く先を気にしながら、遠くからよくよく見ると、なんと崖の中間を走るハイウェイは狭く、しかも、カーブが急だ。あまり見ていると、いろんな心配ごとが浮かんできて、怖くて走れそうにない。これは、前の車、

に対する謙虚な気構え、そして、なによりも、平和を願う彼らの生き方に、少なからず学ぶところがあるのではなかろうか。そんな気持ちが湧いてきた。気分よくなりついついそこに展示されていた土産物を気張った。でも、このインディアンが作ったものと思うが、安いのである。

ここらか、今日の宿、Globe に行くということで、再び 60 号線に戻る。このハイウェイ、幹線であるから時間は夕方になったが、自動車の量もかなりある。このあ

しかも、スピードの遅いトラックの後ろに着くに限る。これなら、おそるおそるののろのろ運転をしても気のせくことはないからだ。それにしても、こんな崖道をハイウェイにしないしてほしいね。あーっ、びっくりした、

というのが、ここを走りぬけた後の実感。



予測もしない怖い体験をして、Gloveにつく。にぎやかな町だ。なんで、と思いたくなる。モーテルも安い割によくできている。わかったここはカジノの町なのだ。というわけで、あの車の量もなんとなく分かるような気がした。アメリカ人はとにかくギャンブルが好きだ。金があるところで、カ

ジノのある町まで、一家を挙げてレクリエーションにくるのだ。

この崖道、無事突破。

さあ、これで、いよいよ、明日はカリフォルニアだ。もう、雪はないだろうと胸をなで

おろした。が、しかし、まだ、まだ、氷の世界が残っていた。

この日の行程

Socorro → National Radio Astronomy Observatory → Datil →

Horse Spring → Reserve → Alpine → Eager →

McNary → Whiteriver → Fort Apache → Carrizo →

Globe

この日の走行距離は、360 Miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 五日目 Dec. 25

### Globe to Hemet

今日はクリスマス。とにかく、あの Wal-Mart できえ、お休みだから、まあ、どこに行っても締め出しは覚悟。というわけで、この日はとにかく移動日。アリゾナの Globe から、Phoenix を経て、カリフォルニアに入る。目指すは、Hemet という町。ロスアンゼルスまでは、数十マイルのところだ。

天気予報では、西から雨雲が来ている。でも、自分が西に向かっているのだから、この雨雲の洗礼はどうしても受けなければならない。心配していたが、夜に雨は降ったようで、朝は小雨程度。天気予報では、フェニックスは晴れているというから、まあ、少しは我慢しなければ。ところが、この日はとんでもないストームの洗礼を受けることになる。



まるで、人がたっているような岩だ。

したる。

Gonzales Pass という峠を越えると、眼下にすごいバレーが広がっている。そのなかに Phoenix の町があるのだ。山を下ると、今度は、岩の平原。とっ、突然、その岩の平原の中に、ありました。ありました。あの、棒状のサボテンです。お釈迦様の手のように、三本の指を空に向かって指差しているようなあれです。いよいよ、ここは、アリゾナの砂漠の雰囲気だ。でも、まだ、このあたり、草木が生えているから、それほど、砂漠という感じがしない。

Globe をでて、ハイウェイ 60 は、すぐに山に入る。地図にはナショナルフォレストの表示はあるが、どの程度の山道なのか予測がつかない。これが知らない土地を走るスリル。

ここが切通しになっていて、ハイウェイの両側に岩山が迫っている。ロッキーマウンテンの片割れのように、岩がごつごつ。そのまた形のこっけいなこと。

頂上あたりには霧がかかっていたので、岩の中には、まるで霧のなかに人が現れてくるような感じのものがある。幻想の世界に酔い



Gonzales Pass を超えるとバレーが広がっている。

Phoenix は、流石に大きい。ハイウェイをどこまで走っても Phoenix という感じ。どんな感じかといえば、町全体が計画的に作られた印象だ。建物の色も、道路の脇の土手も、そして、インターチェンジのランプになっている陸橋も、すべて、ピンクかかった色のコンクリートなのである。この辺り、まだ、天気はすっきりとはれてはおらず、真っ青の空のなかにその姿をみることはできなかった



Phoenix の街角で

が、その淡い感觸の色は、この町がいかにも近代的な町であることを象徴しているよう

であった。そして、ガソリンスタンドによったら、なんと 1.45 ドル。安い。夏にシアトルまでドライブして来たときには、4ドルを超えているところさえあったのに。ガソリンが安いのはとにかくありがたい。

この町がどんな町かと、住宅街をしばらく走ったが、流石に立派な家ばかり。周りにビルがほとんどない。それだけ、土地がたくさんあるということ。一方、ビジネスの中心外には高層ビルがたくさん建っていたが、よくもまあ、砂漠の中にこんな大きな町を作ったなど、感心することしきり。



飛行機が降りてくる

たまたま、ダウンタウンのなかを突っ切る高速道路を走っているときに、飛行機が着陸態勢に入って近づいてきた。これが運よく直ぐ真上にきたのでカメラのシャッターをおしたら、なんとピントがぴったり。車の窓から、高速を走りながら撮った飛行機、これは、価値がある。

Phoenix からは、まさに荒涼とした大地のなかをまっすぐに走っている 10 号線を西に走る。Quartzsite という町にくと、

町のはずれにある小高い山の斜面に、Q の字のマークがついている。こうしたマークはアメリカの町にはよく見られる光景。おそらく、これは、上空を飛んでいる飛行機に位置を教えているのであろう。今でこそ、ナビがあるから飛行機も迷わないであろうが、かつては有視界飛行をするセスナ機などがこうしたマースを頼りにコースを確認していたのであ

ろう。

この町を過ぎると 20 マイルも走れば、すぐにカリフォルニアだ。州境はコロラド川、これを渡る。と、なんと、カリフォルニアに入る車はすべて検問を受けることになっている。普通の乗用車はほとんどなんの確認もなく、一旦停止程度だ。さあ、いよいよ、カリフォルニアまで来たぞ、と胸が温かいものがこみ上げてくる。



#### カリフォルニアに入る車はすべて検問

ドランドだ。やっぱりアメリカはすごいね、という実感。

Desert Center という小さな町があるが、このあたりから、両側に Sand の砂漠が広がっている。草が生えていない。その向こうには、Joshua Tree National Park が広がっている。だが、ここはまさしく、正真正銘の砂漠といった感じ。風で舞う砂埃がものすごい。砂煙とはよく言ったもので、山の麓はその煙でぼんやりと雲っているのである。えんえんとひろがるその砂漠の迫力に感心しながら、改めて砂漠とはこんなものかと想像する。

そして、海拔がゼロメートル以下という Salton Lake にいくために、Mecca に向かう。ここがまたすごいバッドランドそのもの。OROCOPIA 山脈と地図には出ているが、アメリカにはこうした地形がどこにでもあるということ。恐れ入りました。

そのカリフォルニアが豊かな州であることがすぐにわかる。とにかく、農場に緑があふれているのだ。いかに雨が少ないとはいっても、ここにはコロラドの水がたっぷりある。その水のおかげで農作物が豊富に栽培されている。ところが、しばらくすると 10 号線の両脇に秃山が延々と続いて迫ってくる。Blythe という町を過ぎるころに現れるこの光景。まるで、サウスダコタにある、あのバッドランドの異様とそっくり。まさしく、カリフォルニア版バッド



これが砂漠か。Joshua Tree N.P.の前に広がる砂漠。



Mecca の町は、街路にオレンジの木が、しかも、黄色い実を、まさしく鈴なりという感じで、枝もたわわにつけている。ひとつぐらいとってもいいだろうと思うくらい。その数のすごさに圧倒される。オレンジの畑ばかりではない。ブドウ畑、そして、パパイヤの畑。どれにしてもそのスケールの大きさに、これまた、「参りました」の印象。

名も知れぬハイウェイ。でも、この景観。

Salton Lake は、海拔が、-235ft.

つまり、海面よりも低いのである。こんなところが、デスバレーのほかにもあったなんて、初耳。やはりいってみるものですね。ビジターセンターは休みであったが、海岸?まで降りてびっくり。なんと、砂浜ではなく、貝殻浜なのだ。こちらの砂浜はみんなこんな感じ、だから、浜の白さがすばらしい。

Indio という町から Palm Desert という町にかけて、とにかく、住宅が立派。町には Palm Tree がいっぱい。どうして、この町はこんなに豊かなのだろうと不思議に思うくらい、すばらしい町だ。住宅はすべて、まとまって高い塀に囲まれている。だから、その中はわからないが、屋根だけ見ても、立派な家であることがわかる。とにかく、屋根からでているトーチカの煙突の高いこと。きっと中には大きなプールがあるのだろう。うらやましいね。

後で聞いたら、ここは、ロスアンゼルスに近く、リタイアした人たちの老後の居住地としてとても人気のあるところなのだそう。まいりました。

ここから、Hemet に向かおうとしたら、ナビが、10号を案内してくれた。地図には、74号が明らかに近道。しかもシーニックドライブウェイときている。

このコースをなんとしても走りたいと、



Salton Sea は、海拔-70m 貝殻の海岸

強引にナビを変更。しかし、これが、そのあとどれほど恐ろしいドライブになったか。

コースはどんどん山の上に登っていく。しかも、急なカーブの連続。対向車はまるで NAS カーのレースをしているように車間距離も数メートルで飛ばして下ってくる。最初は、楽しい山岳ドライブであったが、そのうち、あまりにも標高が高くなり、対向車には雪を積んでいるものさえ出てきた。これは、また、雪道を走らなければならないのか、と一瞬不安がよぎる。

それでも、こちらから上っていくのは、風下。山の頂上には展望台があり、ここから見下ろす Palm Desert の町の光景。これがまたすばらしい。うっとりとしているのは、いいが、



すばらしい眺望がひらけているハイウェイ 74 の峠

心。

風がものすごい。しかも空っ風といったらいいだろうか、山の頂を越えて吹き抜けてくる冷たい風だ。ということは、これからゆく、山の反対側は雪があるということか。

そのうち霧となり、小雨もまじってきた。そして、峠を過ぎるころには、雨は本格化。先が見えない。しかも、道は急カーブ連続。たちまち

のうちに車の列ができる。が、その中に入って運転しているほうが安

山の頂あたりにつくと、沢山の車が止まっている。最初は事故であったのかと思ったが、パトカーがいるわけでもない。なにをしているかと思えば、みんなで、車を止めて、そのあたりの積もった雪をかき集めているのだ。なかにはトラックに積んで、家まで持って帰り、雪だるまでもつくろうというのであろう。でも、気温が高くなりもう滝のように解けだしているのに、大はしゃぎで運んでいる。家につくころには、影も形もなくなっているのではないか。やっぱり、うまくゆきませんでした、なんて、社を言っている場合ではなかった。ところが、アメリカ人も調子に乗るものがあるんですね。わざとバンパーに雪を載せて走っている車もいる。かれらは、雪を取りにわざわざ山に登ってきているのだ。スコップを持ってきて、これで一生懸命トラックに雪を積んでいる子供もいた。大人も大はしゃぎでやっている。こちらには何十年かぶりの雪といていた。

まさかと思ったこの雪道、ようは、南の国でも標高が高ければ、そして、偏西風のコースによっては、この辺りでもかなり寒くなるということ。それが、今年は、雪の当たり年と

かで、自然の恵みに感謝しているようだ。調べてみたら、この辺り、北緯 34°、標高が 6000ft とあるから、日本で言えば、箱根山辺りになるのではないのでしょうか。それなら納得ということでした。

この日の行程

Globe → Phoenix → Quartzsite → Blythe →

Desert Center → Mecca → Salton Sea → Indio → Palm Desert

→ Mamet

そして、この日の走行距離は、 460 Miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 六日目 Dec. 26

### Hemet to El Centre

昨日の雨がまるでそのような快晴。この日は、念願の Palomar 天文台に行く日。幸先がよい。こんな天気なら、山の上でも大丈夫だろうと、胸躍らせる。何しろ、Palomar 天文台といえば、かつては世界一の屈折望遠鏡、直系か 5 メートルのヘール望遠鏡をはじめ



見事な霧氷。無表情でした

として、最新鋭の観測器をもっており、ここでの観測が天文学の発展に大いに貢献した。ハッブルがこの望遠鏡を使い観測し、ハッブル系列を発見した。また、百以上の小惑星がここで発見されたのも、太陽系の理論の裏づけになっているはずである。そんな天文台に実際にいけるなんてこんな愉快で、楽しいことはない、そんな気持ちで、30 分の余裕を持って出発。出勤時間かこの時間のハイウェイはかなり混んでいる。田舎道と違い、混んでいるハイウェイはかなり気を使うが、アクセスはカウンティハイウェイの 76 号線を走る。この道、ハイウェイと言っても、かなりの田舎道で、道は狭く、カーブが多い山道である。そして、天文台には、さらに山道の S-6 というハイウェイを登る。雪の痕跡もなく、のぼりは快調。時々、眼下にすばらしい展望の視界が開けるが、それは帰りの楽しみにして、まずは山頂に。この道は、山頂近くで、S-7 号にぶつかり、Palomar 天文台には、そこから、かなりの山道を走ることになる。この S-7 号にぶつかる直前で、道の脇にある木に霧氷らしきものが光っている。「うっ、凍りついているのか。でも、道は乾いている大丈夫

だ」と確認し、さらに登りつめる。ところが、天文台への道が山陰に隠れた北の斜面を走らなくてはならない。ここが凍り付いていた。幸い自動車を通ったあとはある。それにしても、坂道を下るときには、半ばスケートリンク状態の道だ。まるですべるようにして走っている。速度を数マイル以下に落とし、ブレーキが効くことを確かめて、ブレーキを踏みながら下る。帰りにスリップでこの道を登れるかが心配だ。そのときにはバックで登るし



洒落を言っている場合ではない。閉鎖だあー。

洒落を言っている場合ではない。閉鎖だあー。

かないか。カーブでは恐る恐るのハンドル捌き。しかし、ここまで来てあきらめるわけには行かない。車の通った後がある限り、そこに人はいるはずだ。なんとしてもたどり着きたい。そんな執念と、帰りに車がスリップしたら、このあとのコースで、サンディエゴまで行くのはあきらめなければならないな、などと考えながら、何とか天文台のゲートまでつく。ところが、たどり着いてびっくり。そこは、雪に埋もれたゲートしかない。しかも。ゲートには、『Closed』の看板。ブルドーザーが一台止まっていて、これから雪かきをする



Palomar 山からの帰り道での展望。

準備をしていた。作業員に聞けば、あまりにも道路が危険なので、天文台は閉鎖しているという。なら、この氷道を下る前に標識を立ててくれればいいのにと思ったが、そうなる、そこで引き返さなくてはならない。天文台にたどり着いたという勲章もなしになる。これはこれで、ここまでやってきたということでひとつの勲章と思い。記念写真を知ることにした。ところが車を止めて外に出ようとしたら、したがつるつる。考えてみれば、よくもこんな道に来たものだと、われながら感心。後は、帰りに

上ることができるかなと思った坂が上れるかだ。のぼりのときには、思い切りスリップを覚悟で精一杯の勢いをつける。スリップしていることは分かるが、何とか車は坂道を登っている。いざとなれば、トラックに引っ張ってもらえばいい。天文台に戻れば、除雪車もいることだからと、少し気持ちが落ち着く。こうして、何とか、もとの峠まで、戻ってきた。のぼりはもうない。これで安心。峠にあったお店で土産でも見ようかと思ったら、なんとこのお店も閉まっていた。閉まっていたのは、このお店ばかりではない。観光客のためのトイレまでもドアが凍り付いて開かない状態。なにしろ、昼間解けた雪の水がつるつるに凍っている。立っているだけでも、傾斜のあるところは靴が滑る。歩くことはできないので、足を片方ずつずらして進むのだ。スケートリンクは平らだから、静止できるが、ここは坂道なので、止まっていないのだ。こんなところに車を止めて、ひとりですべり出したらどうにも手に負えないと、ヒヤッとする思いで、車に戻り、エンジンをかける。沢山の車がここに来て休んでいたが、どの車もスリップをしながら、少しずつ進んでいるような状態。これでは、仕様がなときっぱりとあきらめて、山道を下ることにした。のぼりでみた、あの霧氷はすでに消えている。ああ、残念の Palomar 天文台でした。

Palomar は断念しましたが、この日はもうひとつの目標。大西洋にたどり着くこと。そして、アメリカの南西端にたどりつくことでした。Palomar 山からは、二時間足らずで、その南西端の町、San Diego に着く。この町もかなり大きな町で、ハイウェイはいり込んでいて、よそ者には、ナビなしでは到底走れるような街ではない。目標は、San Diego の先

端にある Cabrillo National Monument というところ。ここには、灯台もあり名実ともにアメリカの先端なのだ。



うれしいじゃあーないですか。なんてたって太平洋なんです。この向こう日本ですからー。

この Cabrillo N.P.の由来は、スペインの最後の大探検家 Juan Rodriguez Cabrillo にちなんでつけられた名前だ。彼は、実は、今ではアメリカ合衆国の領地となっているが、その土地の西部に始めて西洋人として足を踏み入れたその人である。コロンブスがアメリカ大陸を発見してから 50 年後に彼は 3 隻の帆船を従えて、スペイン国王のために、新しい土地と、スパイス生産地であるアジアとの航路を発見すること、そして、黄金を探し出すこと

であった。1542 年に彼の艦隊<sup>o</sup> は、「囲い込まれた素晴らしい天然の良港」と彼が記録している港に停泊しました。丘や谷にはよもぎの一種であるセージのが生い茂り、白銀のよう



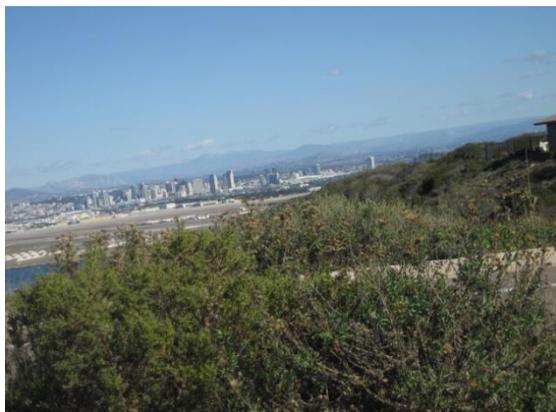
Cabrillo の像のまえで。とにかくここからは San Diego の町が一望できる。

な砂浜は、限りない感激をあたえ、彼はここを「サン・ミゲル」と名づけました。これが、現在の、San Diego というわけです。さらに、彼は、北に向かって航海を続け、サンサルバドル、ヴィクトリアの島を発見、そして、大陸に接近すると、現在はサンペドロ湾と呼ばれている海域に入りました。そのとき、彼は、水平線が雲っていることに気づき、ここを Bahia de Los Fumes スペイン語で、「煙の湾」という意味ですが、ここが、現在のロスアンゼルスというわけです。こうした彼の偉業をたたえ、San Diego を見下ろすことのできるこの半島の丘のうえに、National Park を開いてあるのです。そして、この展望台からは、沖を泳いでいく鯨を見ることができるといわけですから、ここは、とても人気の

あるスポットなのでした。

余談になるが、この National Park にいく道の両側が戦没者のお墓。これがまたすごい。数がすごいとともに、よく整備されている。整然とならんだ墓石は、彼らが犠牲となった平和な今のよのなかを厳しく見守っているような気がした。

## 予定の山道に挑戦



Cabrillo N.P.からの帰り道での展望。



San Diego の町の雰囲気。

San Diego からこの日の宿泊地 El Centro に行くには、インターステーツ 8 を走れば、何



インターステーツ 8 号もなかなかの展望。



突然、なんだ、あの山はっていう感じ

のことはない。時間に余裕があったわけではないが、まあ、大体予定通りということで、Descanso という町から山を登ることにした。Vallecito 山脈を越えて、Anza Borrego Desert State Park の中を走ろうというのだ。道はしっかりしているカウンティハイウェイということで安心していましたが、途中からナビが近道を見つけたのか、違う山道に入りだした。地図をみればそのまま行ってもまたもとの道に入るということで、山をどんどん上ってゆく。そして、峠を越えれば、またハイウェイに戻るところで、なんと交通渋滞。よくよく見れば、道路の脇は凍りついている。そうか、またこの道で事故を起こしたのだと直感。これはくわばら、くわばらと、急遽、もと来た道を半分引き換えし、要領よくたまたま見つけた S-1 のハイウェイに入り、インターステーツに戻ることにした。このインターステーツも実は、このあたり景色がよいことになっている。丁度ここで山を越えるというわけで、素晴らしい切通しの景色だ。ここで何となく気がついたのだが、インターステーツで、シーニックドライブに指定されているところがたまにあるが、そうしたところはなかなか見ごたえがあるということだ。I-70 のコロラドでもそうだし、I-80 のソールトレイ

クでも、そして、I-10のJoshua Tree National Parkの脇を走るインターステーツもすばらしい眺め。これはいいことに気が着いた。もし、チャンスがあるとすれば、そんなインターステーツを選んで走ってみたいものだ。

この日の行程

Hemet → Temecula → Pauma → Palomar 天文台 →

Escondido → Dan Diego → Cabrillo Nat'l Park → Pine Valley

→ El Centro

走った距離は、305 miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 七日目 Dec. 27

El Centre to Tucson

なんとしても、メキシコとの国境にある Organ Pipe Cactus まで行きたいとこの日は、6時半の出発。気合が入っていました。



### 半砂漠状態の中をドライブ

その前に折角だから、Sand Hill を見ようとわざわざ遠回り。以前にネバダの北を走っているときに、ドライレイクの脇にできた Sand Hill というのを見たことがある。湖の湖岸にたまった砂が風の影響で、ある一定の場所に吹き集められ、砂山を作ったというもの。ここは、地図で見てもかなりの広さの砂山が広がっているのだ。

El Centre から、北の Brawley という町まで行き、ここから東にルート 78 を走る。時間と車の向きが丁度太陽の向かって走る格好になった。でも、車は少ないし、道路はまっすぐだから、少々は無理をしても大丈夫だろうと、サングラスをかけ目を細めて車を飛ばす。この Brawley の町をでると直ぐに農園が広がっている。カリフォルニアの緑豊かな農場だ。そんな中に牛の牧場を見たが、これがまたすごい。牛が群がるとまるで牛軍団とでも呼びたくなるような迫力。カウボーイの話の中では、夜、宿泊するときには牛をバレーのなかに押し込めておく。もちろん、縄などかけないから、牛も好き勝手に行動する。時に、その牛が何かにおどろいたりすると暴走することがあるのだ。カウボーイが一番恐れいているのが、この暴走。とにかくあの大きい図体で、何千等がもう突進するのだから、とめようもなく、時にカウボーイに犠牲する出るほどだそう。そんな場面を映画で見ることがあるので、あれだけ沢山の牛が気分すぐれず暴れだしたらどうするのだろうと、余分な心配をする。すると今度はすぐその横の羊の牧場が。その数、これまた、何百等といるだろう。その多さに圧倒される。数え切れなくて、ご免用、綿羊さん。

その前に折角だから、Sand Hill を見ようとわざわざ遠回り。以前にネバダの北を走っているときに、ドライレイクの脇にできた Sand Hill というのを見たことがある。湖の湖岸にたまった砂が風の影響で、ある一定の場所に吹き集められ、砂山を作ったというもの。ここは、地図で見てもかなりの広さの砂山が広がっているのだ。

El Centre から、北の Brawley という町まで行き、ここから東にルート 78 を走る。時間と車



これが Sand Hill の正体。すげえー。

Brawley から 78 号線をはしって間、しばらくして砂地の荒涼とした平原となる。それで



どこまで続いているんだろう

をここまで引っ張って来て、この砂山の上を走り回るといふ集団なのだ。その数からして、これはただ事ではない。何かの大会でもあり、アメリカ中から集まってきているのかと思うくらいである。よくよく見れば、もう、町化している。いくつものテントの中には生活用品を販売しているスーパーまがいの店まである。このバギー車の集団の中には、ここに住み込んでいるものさえいる感じ。

そして、砂山には、あちこちのそのバギー車が乗り回した轍が残っている。その跡の削られ方をみれば、どれだけ激しくタイヤがこ



ナビが指示した Yuma への近道

も灌木が生えているから、これが Sand Hill かと思ひ込んだ。何だ、これなら、あの、Joshua Tree National Park の脇を走っているときに見た砂平原とあまり変わらないな、とのんびり写真など撮りながらこの先どこから Yuma に戻るのかなと詮索していた。と、と、どうだろう。先方になにやら、キャンピングカーの大集団が集まっている山が見えた。

すごい。すごい、これこそ正真正銘、砂山。周りじゅう、砂だらけだ、と思わず声が出る。

実は、あのキャンピングカーの連中、バギー車



こんキャンピングカーの大群。町ができている

の砂をえぐり、町上げていたかが想像できる。こいつら、三度の飯より Sands が好きなやつらだ、なんて冗談を言っていたら、ナビがここを曲がれと指示をしている。なるほど、確かに道はあるし、方角も自分が行こうとしているほうだ。道はまっすぐだが、「えっ、ほんとかよ。」と思うほど、下はあれ道。時々轍は横の路肩からはみ出ている。地図で確認したら、たしかにこの Sand Hill に沿ってまっすぐな道路が 10 マイルくらい続いている。でも、未舗装とでている。近道に違いないが、このまま、このがたがた道を 10 マイルでは、参っ

てしまう。もう少し、先に進めば、ちゃんとした舗装道路があるはずだ。ここはナビに逆らい、すこし遠回りをすることにした。ここから先は、Chocolate 山脈の脇を走らなければならない。名前が素敵だね。どんな山かと思ったら、岩肌がチョコレートした男らしい山が連なっている。Salton Sea の西にある山だ。ここから、今度は S34 号線に入る。カリフォルニアのカウンティハイウェイには、こうして、S のイニシャルがついている。もちろん舗装がしっかりしているので安心して走ることができる。その S34 号線を走っていると、半砂漠化した平原にやたらとキャンピングカーの集団が出てくる。いかにもここに長い間逗留しているような雰囲気。彼らはこうして、周りから束縛されることもなく自由奔放な人生を送っているのだろうか。それにしてもその数に驚く。この RV の販売店の数が Yuma の町の郊外にはやたらと多い。ここには、その需要があるということなのだ。いったい誰がと詮索する。ご存知、Yuma はメキシコとの国境にできた町。国境というだけではない、カリフォルニアとアリゾナの州境でもあるのだ。しかもここにはコロラド川が流れている。もう、ここに不法入国してくださいといわんばかりの地勢学上の意味がある。



Chocolate 山脈の異様な形をした山



アリゾナに入ると砂漠の様相をしたバレーがひろがる

アリゾナに入ると砂漠の様相をしたバレーがひろがる。Yuma から、しばらくアリゾナのインターステーツを走る。このあたり Yuma Desert と呼ばれる砂漠が広がっている。と突然、インターステーツに、車両はすべて停止すべしの標識。よく、トラックの重量を測る軽量の検問はあるが、すべての車両の停止となると止まらないわけには行かない。うっかり、ここで走りぬけたりしたらえらい事になる。検問に行ったら、特に厳しい検査もなく、車の中を覗いただけですんなり OK。「何だ、この検問は」と少々怪訝な面持ち。ところが、これは、このあたりメキシコの国境に近いことの現れであった。最も、この最初の検問は、このインターステーツの脇が Air Force Range になっていたからかも知れない。

インターステーツを Gila Bend という町まで走り、ここから、Organ Pipe Cactus National Monument に向かう 85 号線へ。この道は、メキシコに通ずる幹線道路になって



アリゾナのインターステーツ 8 号の景色。



Ajo の町のショッピングセンター



これがまたユニークな看板。楽しいね。

いる。そして、ここでも検問にかかる。Border Guard Police だ。しかし、アメリカからメキシコ向かう車の検問はほとんどなし。逆にメキシコからアメリカに向かう車が厳しい検問を受けるのはよく知られている。

途中,Ajo という町があるが、町の雰囲気はもうメキシコだ。ここで見たショッピングセンター、真っ白な壁で作られ、まるでホテルの様相。二十メートル近くはあるかと思われる椰子の木の緑の葉っぱとすばらしいコントラストだ。そして、この町で

立ち寄ったガソリンスタンド。そこで見た看板、これがまたユニーク。なんて書いてあるかといえば、「この世の果てまで、9 マイル。Ajo の町まで、12 マイル。」いったい何をもじっているのかなと不思議に思ったが、実は、Ajo の町まで、12 マイルのところに Why という町がある。この町から 9 マイルのところに目指す Organ Pipe Cactus の草原が広がっているのである。

こうして、ようやく



高さは5Mはあるね。Saguaro Cactus

公園であるから、サボテンばかりでなく、さまざまな動物の観察なども楽しめるのである。ここで初めて念願のあの、空に向かって指さしをしているあのサボテンと記念撮影。うれしいねえー、こんなショットが撮れるなんて。ところが、この Organ Pipe Cactus というのは、別のサボテンであることがわかった。地面から内輪の骨のように沢山茎が出ているのが、Organ Pipe Cactus で、指の形をしたものは、Saguaro Cactus というのだそうだ。



なんと、展示物に「さわってごらん」とある

こと、Organ Pipe Cactus の公園に着く。公園のビジターセンターには例により、レンジャーがいて、ここの植物や地形について詳しい説明をしてくれる。また、インストラクション用のビデオも用意されていて、ここの砂漠のできた歴史を解説してくれる。何百何年もの昔からの地球の歴史のことであるので、これは大人のみならず、子供たちにとっても興味の尽きない話である。キャンプ場があり、ここに何日もとまりこのサボテン公園のなかをトレッキングするのが盛んのようにだ。たまたま入ってきたご夫婦の奥さんのほうが、ここでキャンプをするにはどうしたらよ

いのか熱心に聴いていた。と

にかく広大な



こちらが Organ Pipe Cactus

カリフ

オルニアからアリゾナ、そして、ニューメキシコにかけて、メキシコとの国境は、以外と標高が高い。ここは高原になっている。この高原のことを Sonora Desert と呼ぶ地形らしい。ただし、この広大な砂漠地帯でも、雨量が場所によって違い、そのサボテンの保水力により、こうした違った形のサボテンが得意的に分布するのだそうだ。だから、このいったいは、この Organ Pipe Cactus の群生地なのだが、もう少し、東の

Tucson 辺りに行くと、今度は、Saguaro Cactus が主流になるということらしい。しかし、どこに行ってもすばらしいサボテン天国。こんな荒野のなかを一人でドライブして楽しむのはなんとなく気が引けるような気がした。

ここのビジターセンターでも、例により粋な展示物を見た。なんと、そこに陳列されているこのサボテン公園のなかで見たり、近づいたりすることのできる植物、動物の標本に「触ってごらん。」とある。これが実にすばらしい。手から伝わってくる展示物の実感。さわって味わう感触、これが、珍しいものに興味を抱く瞬間なのである。アメリカのナショナルパークでの展示物に、こうした子供たちに興味を持たせる工夫がされているのは、ぜひとも日本の文部省などでも、率先して指導してもらいたいものだ。

ここからの帰り道、Santa Rosa というドライバー沿いにインターステーツに戻る。つまり、メキシコからアメリカに向かう方角だ。この街道はカウンティハイウェイであるが、ここにも例により検問所があった。しかも、予想通りの厳しさ。「アメリカの市民か?」と聞いてきた。「市民ではないが、アメリカに住んでいる。H1 ビザで働いている。」と説明。ここは、免許証とパスポートを提示して、通行を許可された。メキシコとの国境を走るといふことで、パスポートを持参したのは正解であった。



こんな景色を独り占め。許される?



そしてこの夕焼け。許される?

この日の走行距離がかなり長くなり、すでにこのハイウェイを走っているときに夕暮れとなる。Tohono O'odham Nation と呼ばれるこの一帯、いったいどんな歴史をもつ場所なのかと興味は尽きない。広大な土地がインディアンの居留区になっているのである。

インターステーツにのったころには

すっかり日が暮れてしまった。昼間はあれだけ天気がよかったのに、なんと、地面がぬれているのではないか。道路わきには水溜りさえある。雨が降ったのかと、ギクツとしたが、どうも濡れているのは道路沿いだけ。これはどういうことかと不思議に思ったが、どうも、夕暮れに道路の脇に散水設備があり、一斉に水まきをしたのではないかと思う。夕暮れ時に遠くからみたら、それが水蒸気となって、この一帯だけ霧がかかっていたのもそのせいではないか。

この日の宿泊地は、**Tucson** ツーソンというらしい。メキシコに向かうインターステーツ 19号との分岐点でもあり、また、町には、**Air Force** の **Base** もあることからなかなか町である。それだけに交通量が多い。ただ、まいったのは、このインターステーツが町の入り口からずっと拡張工事をしていて、そのおかげでハイウェイへの出入り口が閉鎖になっていたのだ。看板にそれらしき案内が出ていたが、こちらははじめての場所でもこの出口かも分からず、頼りにしているのはナビだけ。そのナビには工事のことなど入力されていない。町中に入り、ナビがインターステーツから出るように指示しているが、出ることができない。「あっ、これはいかん。」と置いていたら、モーターの看板があつという間に過ぎていく。しかも、その先でハイウェイは分岐しており、ナビもどちらに進んでいるのかわからなくなってしまった。しきりに探索をしているようだが、何度も何度も『リカリキュレーション』。仕方なく、あてずっぽうに U-ターンをして、元に戻るがこちらも出口が閉鎖。なんと、数マイルも戻るはめに。そのうち、ナビが見付けたのは、なんと、数十マイルまで戻るというコース。トンでもない。モーターのあるところは分かっているのに、このままでは、行ったりきたり、同じことの繰り返しになってしまう。何とか、ハイウェイをおりなければ、ととにかく一番初めの出口で降りることにした。そして、あて推量で、町中の道に入る。ナビはしきりにもう一度、インターステーツに乗れと指示している。それでも、ごく近くまでくると、ナビも場所が判明したのか、しっかりと道筋を教えてくれた。ありがたい。これで助かったとの実感。しかし、まあ、こんなときナビがなくては、お手上げ。ナビのおかげでこうして楽しい旅ができることに、なびなびならぬ(?)気持ちで、改めて感謝。

この日の行程

El Centre → Brawley → Glamis → Yuma → Gila Bend

→ Ajo → Why → Organ Pipe Cactus M.N. → Why

→ Covered Wells → Arizona City → Eloy → Tucson

走った距離は、497 miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 八日目 Dec. 28

### Tucson to Douglas

昨日は、インターステーツの出口が工事中で閉鎖。このため、出口が分からず右往左往。とんだ時間を食いました。それにもめげず、今日は、このドライブの目的のひとつ、天文ファンにはお馴染み、そして、ここに行くことが勲章にもなる **Kit Peak** の天文台を目指す。



うわあー。天文台だあー。

もそのメンバーになっている。このクラブ、毎月の例会でいろいろな講演をしてくれる。これがなかなか貴重な話を聞けるのだ、そのひとつ、メンバーの一人が **Kit Peak** 天文台いで二年間家族も一緒に過ごした話をしてくれたことがある。もっとも、家族は山の上は無理だから、したの **Tucson** の町に住んでいたのだろう。とにかく、そんな話を聞いていたこともあり、ここに来ることのこだわりもあった。

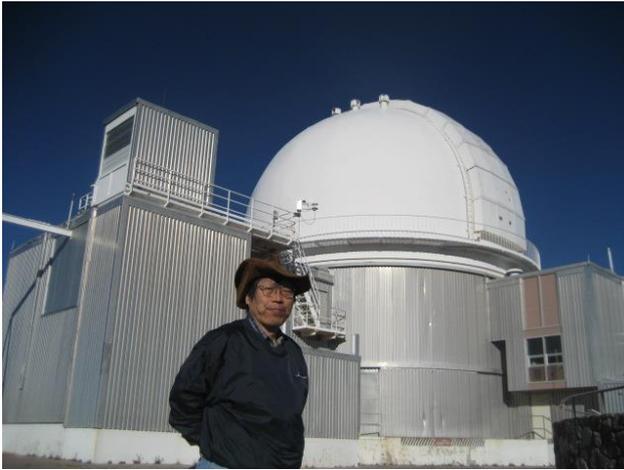
この日も、日ごろのよい行いのおかげでといたくなるようなよい天気。空は澄み、青空と鼻歌がでるくらい。この 86 号からは山の景色がよく見える。時間をみながら、そろそろかなとの期待。とにかく、山の頂上に白いものが見えたら、いただけないのだ。雪のないことをとにかく確認したい気持ち強い。そんな気持ちから、ちよくちよく前方の山を見ていたら、なんとなく、遠くに見える山の頂上に、白いものが見える。いや、見えるような

アリゾナが、南国とは言え、標高が 3000 メートル近くある。サンクス・ギビングとクリスマス、そして、正月以外はやっているというので、何とか開いてほしいの期待を胸に、一路、ハイウェイ 86 号を **Mt. Kit Peak** に向かう。一時間ほどの距離だ。

実は、リンカーンで、アパートの近くにあるホルムズパークというのがあがあるが、ここにリンカーンの天文ファンがクラブを作って天文台を持っている。アメリカに来て直ぐに、土地の人との交流をとの目的で私



とうとう来ちゃいました。ここが宇宙への扉です。



こんな写真に憧れていました。

崖から墜落なんてことにならないよう、まだ朝は早かったのではほかの車はいなかったが、慎重にハンドルを切る。カーブを切るたびにあの岩山の上にある天文台の姿がだんだん大きくなっていく。いよいよ、目指す **Kit Peak** だ。うれしくなる。天文台が二つ、三つと見えてくる。そして、あの有名な太陽観測用の、独特な三角形をした建物も、その姿を目前に現してきた。「あー。俺は **Kit Peak** まで、来たんだ。」の感激の一言。やったぜ。駐車場に車を止め、**Visitor Center** へ。もちろんこの日の一番乗りだが、職員はすでに忙しそうに働いていた。

気がした。まさか、それが **Kit Peak** の天文台だとは知らないから。見えるような気がしたとっておこう。そして。その山に近づくにつれて、これが天文台であることがはっきりしてきた。しかも、山には雪はないようだ。ここは、乾いた土地なので、この冬、雪がなかったのだろう。これなら、上までいけそう。そんな期待が膨らむ。

やがて、アクセス道路に入る。山は、岩山そのもの。あちこちが崖の連続。また、崖だけに展望がよく効く。見とれて



調子に乗ってもう一枚。

朝、一番乗り。**Visitor Center** で、簡単な説明をしてもらおう。時間があれば、ガイド付きのツアーがあるのだが、今日の予定もあり、また、昼間では天体観測をするわけにもいかないので、一人でツアーに出かける。まあ、それにしてもたくさんの望遠鏡が設置されている。なんと、光学望遠鏡だけで24基、そして、2基電波望遠鏡。なんとといってもユニークなのは、太陽観測望遠鏡。**McMath-Pierce Solar telescope** と呼ばれているもので、地球の自転にあわせて太陽光が固定された望遠鏡の中に差し込んできたときに観測するというもの。その独特な形、そして、スケールはこの天文台の目玉でもある。

ここには、専門の天文学者たちが観測する望遠鏡のほかに、アマチュアの天文学ファンに解放された望遠鏡が設置されている。夜、とまりでここに見学、というより、星空散歩を

楽しみにくる人がいる。ちなみに金額は、一晩の観測で、41ドルとのことであった。もちろんプロたちは、夜が仕事。昼間は寝ているのである。そんなわけで、見学者たちは、彼らの就寝の邪魔をしないように注意を呼びかけられている。パンフレットには、

**Kitt Peak National Observatory is a working observatory; therefore, astronomers sleep during the day. Please keep this in mind when walking to the telescopes since dorms are located nearby.**

彼らの住んでいる建物がいくつかある。そのそばを通る。「ああ、なんと彼らは好きなことをして、幸せなんだろうなあー。」とちょっとうらやましい気持ち。まあ、これも仕方ないさ。

この山頂、広さが200エーカーほど。計算では、300メートル四方くらいある。しかし、望遠鏡はあちこちに点在しているし、また、結構、上り下りもある。有名な太陽観測の望遠鏡を見学。坂道をかなり下ることになるが、ここに来て、これを見ないわけには行かない。こうしてたどりついた太陽望遠鏡。



もちろん、ご存知のよう太陽観測で一番大切なのは、黒点観測。これにより、地球に届く太陽風が変わる。

これが太陽観測用望遠鏡

この黒点の活動には、11年周期であ

る。そして、その周期がまた、55年で繰り返されるといわれている。地球の気候の変化はこの黒点活動に影響されていることがわかっている。つまり、われわれは、人生のうちで何回かは、異常気象の洗礼を受けるというわけ。一年や二年の温暖化現象、寒波の襲来などと気にするより、十年おきくらいに地球の気象が変わることの対策を考えることのほうが重要だと思いますがねえー、などとそんなことを考えながら、この望遠鏡のなかを見学した。

あまり時間もないので、ビジターセンターで一通り、説明の展示資料を眺めていた。と、かなりの年配の人が、一人杖をついて入ってきた。太陽活動を解説しているビデオをじっと見ている。どうも、見学者ではないようだ。職員、といっても、ここで働く人は一介の天文学者か、天文技術者たち。なぜか風格を感じたが、推測するに、ここの天文台のドームの設置を推進した先生ではなかろうか。確かに、現役時代に一生をかけて、ここに望遠鏡をすえたとなると、もう、それだけで、天文学の世界でも、教祖的な存在なのだ。そし

て、有頂天になり土産物を買っているときにこの老人がつかつかと私の隣にやってきて、職員のひとつと親しげに話をしている。職員の人、この人、片言の日本語を話した。いきなり、「ありがとう。ございます。」という。でも、自分のことを「天誅組」などと言っている。誰が教えたか、まあ、あんまり感じのよくない日本語だ、と思ったが、ここは、「なかなか日本語が上手だ。」とほめておいた。何でも、Army で日本に数年滞在していた経験があると。なるほど。その職員と老人が、私の買い物を見て、なにやら、私を冷やかしているらしい。何のことは分からなかったが、インディアンのもも含めて、いろいろよく深く買ったものだから、いい歳をして沢山買うよと言っているらしい。なぜか、この Gift Shop には、インディアンの工芸品が陳列されていた。他では、なかなか見られないものもある。しかも、その値段が格安。聞けば、この地域もインディアンのリザーベーションになっている。例の Tohono O'Odham Nation の一角だった。インディアンたちにこの観測所の山を借りている代わりに、彼らの工芸品をこの土産物として販売しているのだという。ほしいものが沢山あり、自重したのに、あの天文学者らしきおじいさんには大笑いをされた。悔しいから、「これは、私の孫への土産だ。でも、いざとなれば、あの世に行くときに、自分と一緒に持っていくのさ。」といたら、大笑い。

朝の一番乗り。帰るころには、数グループの家族連れ。なかには、二人だけできている老夫婦。子供の教育のためなのか、お父さんが一生懸命説明している家族もある。ここは、標高が、6,875 feet。下界を見下ろしながらの憩いのひと時、たまらないね。

この Kitt Peak から、再び、Tucson にもどる。その途中、検問所があり、特に問題はない



**Saguaro National Park**

が、ここがいかにもメキシコとの国境地域であることを痛感させられる。次の訪問地は、Saguaro Nat'l Park。この Park は、Tucson をはさんで、西と東に分かれているが、私が寄ったのは、Arizona Sonora Desert Museum のある西の公園。こうした、アメリカの公園はとにかく、広いし、のびのびとしているので、俗世間を離れてゆっくり見学できるのが特徴。だから、Tucson から 20miles くらいはなれているここも、ゆっくり見学できるだろうと、公園へのア

kses道路を気持ちよく走っていた。例により、アップダウンとカーブのある、例の Saguaro

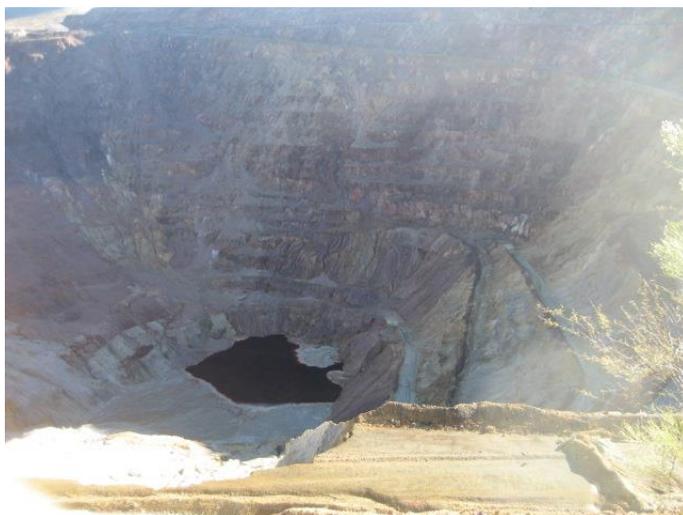
Cactus( サワロサボテンという ) の林を眺めながら。ところが、この公園の広い駐車場に入っぴっくり。なんと駐車場に黒山の人ばかり。とにかく、すごい人気の場所だ。子供たちが大騒ぎしている。アメリカの National Park でこんなに人気があるのは、珍しい。入場に列を作っている。何か特別の催しものでもあるかと並んでいる人に尋ねたら、ごく当たり前のように、平然とした顔で、「I don't know.」中に入って分かったが、ここは、広大な敷地の野外博物館だが、ただ、爬虫類、特に、蛇やトカゲの展示は、特別の館があり、実にさまざまなラトルスネーク、トカゲ、そのほかの珍しい爬虫類を見ることができる。ラトルスネークは如何にケースの中に入っているとは言え、これが、俄かによりよると動き出すと、みんな、「うわあー。」と指差していた手を引っ込める。これが楽しい。子供たちの目当てはこれだったのかも知れない。

この日、止まりはメキシコとの国境にある Douglas という町。ここには、インターステーツ 10 を Benson という町でおり、ハイウェイ 80 に入る。そして 20 マイルも走ると、田舎の小さな町、Tombstone という町になる。なんと、この Tombstone の町こそ、これまで、どうしても分からなかった OK 牧場のある町だった。このときにはそんなことが分からず、只、通り過ぎるだけのことになったが、前に知っていれば、なんとしても、その牧場にいったのになあとは、後の祭り。何しろ、あのワイアット・アープとドグ・ホリデーがクラントン一家と打ち合いをした場所。西部劇一のクライマックスがここで起こったのである。カンザス辺りから、ニューメキシコ、そして、テキサスを渡り歩いたワイアット・アープがまさか、このアリゾナにいたとは想像だにできなかった。でも、これで、ここを通ったということは、OK 牧場のあるところまで来たという実績はできた。うれしいもんだね。

## Bisbee に来てびっくり。

インディアンの土産ものの中に、とりわけ高価なものがある。それは、淡いブルーの色をした石を加工したもの。インディア人が首飾りなどに使っていたものを、今では土産物としているが、これが、ひとつ、200 ドル以上する。なかなかいい値段だ。

そのブルーの石の産地がここだという。Bisbee Blue といって、ここから採石されたもの。ハイウェイ 80 号沿い、あと 8 マイルも行けば、メキシコというところだ。地図に Lavender Pit/Queen Mine の案内



Lavender Pit と呼ばれる鉱山あと。

がでているが、何の気なしに立ち寄ったパーキングがその採石場を見学する場所だった。そこで、**Bisbee** 一帯がかつては重要な銅の産地であったことを知った。一時は、4000 フィートの深さに、全長で、2000 マイルくらい掘られていたらしい。この鉱山は銅ばかりではなく、亜鉛や、鉛、そして、金などもよく産出したらしい。その中に、ブルーの色をした石があった。**March and Bob Matthews** はこの石の採掘権を取得した。じつは、これは、トルコ石と呼ばれる宝石のひとつだったのだ。この石が装飾品として幅広くインディアンの工芸に使われるようになり、彼は、ここ **Lavender Pit** と呼ばれる鉱山のほかにも、あちこちに試掘をしたのだが、それはことごとく失敗し、結局、このトルコ石は、非常に狭い特定の場所にしかないということが分かり、ますますその価値が高くなったとのことである。そのトルコ石の採石場が道路わきにあるのだが、このピットの深さは百メートル以上あるのではなかろうか。

この町を過ぎると、もう、メキシコとの国境を走っているようなもの。と、ギクッ、後ろにいつの間にかパトカーが。とにかく、このあたり、パトカーの数がものすごい。其れだけ、国境越えが簡単にできるところなのだろう。



国境警備隊の警察署。

そして、**Douglas** の町につき、ちょっとばかり、メキシコとの国境を覗いてみようと、南にむけて車を進めていた。すると、道路わきに、おっ、なかなか粋な建物だ。写真でも撮ろうかと、思い、その建物のパーキングに入ろうとしてギクッ。なんと、ここは、州警察の建物でした。

この日の行程

Tucson → Pan Tak → Kitt Peak → Saguario Nat'l Pk →

Tucson → Benson → Tombstone → Bisbee → Douglas

走った距離は、243 マイルでした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 九日目 Dec. 29

### Douglas to El Paso

ここ Douglas の町は国境の町。何度も検問を通過してきただけに、ちょっと緊張の一晩。しかも、寝入っていた真夜中に、どうも外が騒がしい。女性の声がして、はじめは隣の部屋にきた客かなと思っていたら、なんとなく私の部屋の鍵を開けようとしているらしい。これはただ事はないと、やおらベットからでて、恐る恐る窓をのぞいてみたら、きれいな



お姉さんがそこに立っているのではないか。こんなとき、ドアをあけたらよいか、なんて、迷っているほど浮かれていられない。窓越しに、「Who are you?」と、行ったら、「I'm sorry.」と言って、そのまま、どこかに行ってしまった。想像たくましい人は、さては・・・とお思いかもしれないが、実は、このお嬢さん、部屋を間違えただけでした。その証拠にしたには友達が心配そうに待

っていたのがすぐ分かりましたから。ご安心ください。

すっかり仲良しになったパトカー。もちろん許可済み。

そんな、ハプニングがあり、また、この日は、アリゾナを走り、ニューメキシコの National Park である White Sands に行くことになっていた。かなりの時間がかかるということで、朝、少し早めに出発。

Douglas の町をでて、すぐに検問所があったが、誰も警察が立っていないので、ちょっとときになったが、そのままと抜ける。まさか、後ろから追いかけては来ないだろうなと思いつつ、そのときの言い訳を考えながら走っていたら、なんと、なんと、たちまち後ろから、猛スピードでパトカーが追いかけてくる。検問に立っていないお巡りさんのほうに問題があるのではないの、というのを英語で言うにはどうしたらいいかなど考えて、仕方なくスピードを落とし路肩に寄せる。近づいてきたパトカー。これが私の前に止まれば、さあいよいよ、英語の勉強だと観念したのに、あれ一つ、とまらない。パトカーはまるで私の車などにかまっては要られないという感じ。なにがおこったのだろうと怪訝に思いながらしばらく、走っていると、やっぱり、私の前にパトカーが立ちはだかっている。しかも、路肩に止めろというのではなく、道路を塞ぐ格好でパトカーを止めている。これは、何か、もう犯罪者でも捕まえるかのような雰囲気。いったい私が何をしたんだというつもりで車を止め、窓を開けたら、若いポリスがやってきて、なにやら早口で喋る。もちろん、

どんな状況なのか正確にはわからなかったが、どうも、ここで、スピードを出しすぎて道路からはみ出て横転し、怪我をしたらしい。その怪我人を病院に連れて行くためにヘリコプターが来るので、その着陸のために道路を閉鎖するという事らしい。30分くらいで処理が終わるといので、このまま、ここで待つことにした。しばらくするとヘリがやってきて、やがて怪我人をつけて飛び立った。これで、通り抜けられるかと思ったら、こんどは、もう一台ヘリが来ることになったらしい。時間がどのくらいかかるか分からないという。私のアリゾナからニューメキシコに向かうルートはここしかない。これはえらいことになった。せっかく、朝、早めにモーテルを出たのに。ここで、半日も足止めを食らっては何にもならない。何とかしてくれよ、の気持ち。でも、よくよく考えれば、そんなに時間をかけていたのではレスキューの意味がない。怪我人を一刻も早く病院に運ぶためにやっているのだから、最短の時間で処理しているはずだ。そう思ったら、

少し気持ちが楽になり、このお巡りさんと仲良く話をする事ができた。このあたりは、メキシコからの労働者が毎日たくさん働きに来るところだし、それに、何も無いところで、車でドライブするときには、ガソリンを満タンにしておかないとどうなるか分からないよ、と親切に教えてくれた。朝が早かったこともあり、



車はハイウェイから十メートルくらいはみ出ていた。

随分冷え込んでいた。気温はマイナスである。南の地方にしてはこれは厳しいと思ったが、ここは内陸で、昼間はかなり暖かくなるが、朝晩の冷え込みが厳しいとのこと。もっと南のメキシコも同じだという。自然は厳しいね。

そんな話をして、無事、二台目のヘリも飛び立ち、道路が通れるようになった。徐行を



州境を走るハイウェイはとても景色が良かった

しながら事故の現場を見たが、なんと車は道路から十メートルくらいずつ飛んでいる。窓ガラスは割れているから、二転三転したのではなかろうか。それにしてもよほどスピードを出していたのだろう。私もこのカーブの直前にスピードを 50 マイルに落とせとの標識を見て、注意をしていたが、この状況から見るとかなりのスピードがでていたようだ。どうも、推測するに、この道路が、ハイウェイ 80 というのがよく

ないのではないかと思う。スピード制限は、通常、65 マイルなのに、時々、道路の案内板が出てきて、これに、80 と書いてあるのだ。知らない人がみれば、「何だ、ここは 80 マイルでいいのか、ならスピードをもっと出さなくては」、ということになってしまうのでは。よく、標識をスピード制限と間違えそうになることがあるので、こんな推察をして、もしそうなら、お気の毒にと言う気になった。



こんな道なら,100 マイルでも安全

こんな事故があつて、せっかくの朝のはや立ちが帳消しになった。30 分のマージンが 30 分の遅れとなった。これを何とか取り返さなくては、とスピードを出そうとしたが、そんなことをしてこちらが事故を起こしたのでは元も子もない。このハイウェイが州境を走るもので、しかも、景色が抜群にいい。時間はあとで何とか調整しよう、とのことでこれを楽しみながら走ることにした。何かありそーなアリゾナ、と、とんでもないことがあつた一件でした。



町の入り口の湯 YORK なモニュメント

う。町の入り口には、すばらしい、モニュメントが立っていて、遠くの山々を背景にして記念写真を撮っている。そして、この町からこの日の目的地、White Sands National Monument に行くには、St Agustin Pass という峠を越える。標高が 2000 メートル近くあるが、この峠になんと、ミサイルの模型が立っている。実は、ここは、Military Reservation だったのだ。White Sands Missile Range とあり、not open to public となっている。そのなかに

ここから、10 号線に入り、Las Cruces に向かう。この辺りのインターステーツもなかなかすばらしい景観。丁度ロッキー山脈が終わりとなるところか。この町、インターステーツの 10 号と 25 号が交差する町で、とてもにぎやかな町。町の名前は、フランス語でそんな意味を持っているのではないかなと思うようなつづり。交通の要衝とし

て栄えた町なのであろう。



ぎょつ。ミサイルだ。

National Monument があるというわけ。しばらくすると、検問があった。これまで、メキシコからの検問所は簡単に通過できたので、ここもその程度かと思ったら、これが厳しい。アメリカ市民かと聞くから、市民ではなく、住民だといった。ビザで働いていると説明。そしたら、免許証を持って行って、身元を調査するという。こんな調子だから、普通の旅行者など、なかなか立ち入ることができない。それもそのはず、途中で、小型ミサイル基地など書いた看板が立っていた。しばらくして、係官が出てきて、身元の確認ができたから通貨してよろしいということになった。実は、ここに来たのは、日本にいる友人の中塚氏から、アリゾナに五角形の形をした砂があるそうだ。ただし、そこは、原爆の実験場でもあるので立ち入りが難しいが挑戦する価値はあるという連絡をいただいていた。その五角形の砂のあり場所が **White Sands National Monument** かどうかは分からないが、と



これが **White Sands** だ。

とにかく、ここがアメリカのミサイル基地の中にあることは確か。この砂丘の見事は、また、格別。なんでこんなところに砂があるのかと不思議に思うが、アメリカ人は、海岸を知るチャンスがないので、もちろん海の砂丘など知らない。そんなこともあり、この砂丘はとても人気があるようだ。しかも、夕日の砂丘がとても人気があるということで、私が帰るころになって車の行列ができるほどたくさんの人が見学に来ていた。この砂のでき方は、どうも、ドライレイクの砂が風で集まり砂丘

を作ったのではと思うが、詳しいことは解説書を見ることにしよう。

**White Sands National Monument** の解説書のなかに次のような説明があった。

ここは、250 百万年前には海のそこだった。それが、70 百万年前に、ロッキー山脈ができたときにその海のそこが隆起した。しかし、その後、隆起したその中央部が 10 百万年前に陥没した。これが、**Tularosa Basin**

となったが、この盆地は周りを山で囲まれ、ここにできた湖の水は外にでることが

できなかつた。こうしてここに流れこむ水が、周りの岩山から硫酸カルシウムなどの沢山の鉱物を運び込んだ。そして、水が蒸発するとともにそれが結晶化し、析出したのである。



これは、塩なのか、砂なのか。



大きなものでは、3 フィートくらいの結晶にもなった。ところが、長い年月の間に、溶解、結晶化、風化、粉砕などを繰り返して、これが、風で運ばれるほどの大きさの砂になり、やがて、いつも一定のほうから吹いてくる風のために湖のある一定の場所に砂山ができた。これが、今の **White Sands** の砂丘だということである。

舗装しなくてもこの状態。スペースシャトルの着陸訓練場もある。

もちろ、ここの砂は、**National Park** のものだから、持ち出し厳禁。一粒たりとも持ち帰ってはいけません。ただし、学術研究のためなら、少しは許されるだろうと勝手に解釈。中塚氏のために靴のついた砂ということで、数千粒を失敬した。一粒、一ドルとしても、数千ドルか。まあ、いいや。

もちろん、ここの砂は、**National Park** のものだから、持ち出し厳禁。一粒たりとも持ち帰ってはいけません。

**White Sands** については、中塚さんへのレポート「星形の砂を求めて」参照。



少し遠回りになるが、ここから **Alamogordo** の町にでて、ハイウェイ 54 号を走った。このハイウェイも **Rort Bliss Military Reservation** に沿って走っている。しかし、このハイウェイからは、この基地の中は見えない。ハイウェイと基地の間には山脈が走っていて、ここには行くには一本の道しかない。そんなところは、とにかく道がまっすぐで車を飛ばすには格好の場所。

どこまで続く、ものすごい長さの貨物列車

しかし、ここでスピード違反ではどれだけ絞られるか分からない。すこしばかり

遅くなったが、まあ、ゆっくりいくかと安全運転を心がけた。

感激いっぱいこの日の宿は、**El Paso**。ここもメキシコとの国境の町。モーテルにはちょうど夕日の沈むころについた。予約をしてあったのに確認できないという。でも、こちらは何とかなるもの。思い通りの部屋に泊めてもらうことができた。そして、三日月の両側

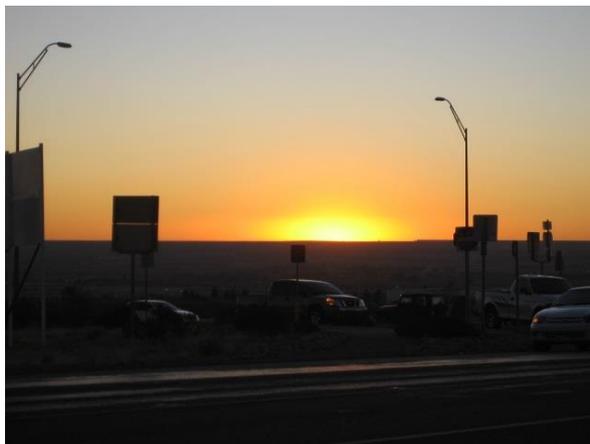
には、金星と木星が。これも、なかなかロマンチックな夕焼けだ。

この日の行程

Douglas → Lordsburg → Deming → Las Cruces → White Sands

→ Alamogordo → El Paso

走った距離は、397 マイルでした。



この日も素敵な夕焼け。明日も天気だ。

## 何かありそなアリゾナ紀行 十日目 Dec. 30

### El Paso to Fort Stockton

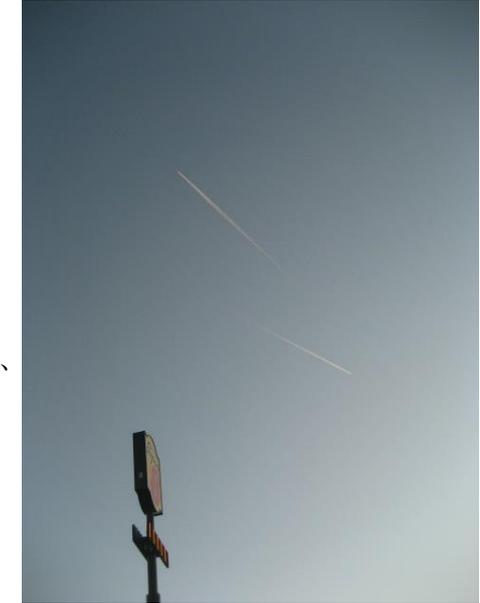
昨日は、朝、とんでもないハプニングがありましたが、今日は、どんなもんだったのでしょうか。何はなくとも、初めて見るアメリカのものすごさに感激だけは、この日も続きました。

El Paso は朝の通勤状況を見て、ここがかなり大きな町であることがよく分かります。郊外から仕事で町の中心に向かう道路は片側五車線でも車がびっしり。それでも、動いているのは流石。みんな車間距離数メートル以内で走っています。たいしたもんだ。

この日も、かなりの距離をドライブすることになりそうなので、一時間早く出発。

当初の予定では、この日はまず、El Paso の東、90mile のところにある **Quadalupe National Park** に行き、そのあと、**McDonald 天文台**に行くことになっていた

が、丁度、ことしの冬のバケーションにカリフォルニアまでドライブで出かけるという小



アメリカの町でよく見かける朝の光景  
飛行機雲がすがすがしい。

田さんに、旅の途中の見所として、この近くにある **Carlsbad Caverns National Park** を紹介した。どちらも素晴らしいところであるには違いないが、ここの **Cavern** のスケールがほかではなかなか見られないものだという紹介があったので、ここをたずねてみてはと推薦した。他人に推薦して、自分が行かないのもおかしい話と、そんなことから、私も、

この **Cavern** をたずねることにした。  
地図では、**Quadalupe Mts. National Park** からさらに 30 マイ



El Paso から 62 号線を東に。見事な荒野の中の道

ルもある。そんなわけで、この日もできるだけ早く出発をと、予定より一時間はやい七時に出発。これなら、この日の行程はかなりの余裕があるはずだ、との目算。ところが、こ

れが大間違い。

とにかく、車から見える景色がすばらしい。地図には只の真っ白な地域であるが、ここが延々と広がる荒野なのだ。人間の手のついていない自然そのものがそこにある。ついつい、車を止めて記念にパチリとやりたくなる。そんな場所がここにもあった。よくよく見れば、**Salt Lake** とある。規模は小さいが、

その迫力は変わらない。車で少し町から離れば、こんなすばらしい景色のところがあるのだから本当にう

らやましいと思うのだが、もっとも現地の人にしてみれば、こんなに役に立たない土地はいくらあっても無用の長物なのかもしれない。複雑な思いだ。そして、直ぐそのあとに、テキサスでもっとも最高地点の、**Quadalupe** の山がある公園に着く。この山がまた、ハイ



見てください。気品を感じさせる **Quadalupe**

この **Quadalupe** 同じようにしてできたのが、**Carlsbad Caverns** のある山地。こちらはアメリカでも指折りのものということではあるが、どこの鍾乳洞もでき方は同じようなもの。それなら、と、計画では、ここの鍾乳洞のセールスポイントになっている **Big Room** という、とりわけ巨大なドームを形づくっているところを見学すれば十分くらいに考えていた。ところが、これが、トンでもない思い上がり。自然のなす力はこちらの想像をはるかに超えていた。



ここにも、**Salt Lake** ずっと向こうには **Alkali Lake**

ウェイの直ぐ横にあり、今にも覆いかぶさりそうに迫ってくる。青空の映えるその白い岩肌は、気品さえ感じさせるほどの見事な岩山だ。もちろんここは、かつての大陸棚が隆起してできた山。ここから貝の化石がでるということで、世界中の地質学者が研究に来るのだそうだ。

ハイウェイの標高は、1700メートルくらいのところを走っている。この山の

頂きが、2,670メートルというから、落差が1,000メートル近くあるわけだ。そのすごさに圧倒される。

まず、この鍾乳洞の見学には、エレベーターで地下、230メートル以上もぐる。その深さに度肝を抜かれるが、そこにできているこの洞穴がまた、どでかい。これまでも何度か、こ



ここまで、何百万年かかりました。

この類の洞穴を見学したことがあるが、それらはいずれも天井までの高さが数メートル程度のものが多い。中国の本溪の洞穴の時には、確かに、船で見学するなど、そのスケールはなかなかであったが、この洞穴は、奥行きばかりでなく、洞穴の高さがすごい。三十メートル、いや、なかには、五十メートルくらいあるのかもしれない。この穴の高さが高いということは、そこにできた塔の高さもどでかい。

この鍾乳洞、スケールが大きいというのを、どんな表現ですれば適当なのかはよく分からないが、一言この洞穴の様相はと言えば、まさしく、地下帝国という感じ。これだけの大きな空間があれば、どれだけの人間がここで暮らすことができるだろうかなどと思いをめぐらすほど、とにかく、スケールが大きいのだ。

ほんの一角だけを見て切り上げるつもりだったが、自然が何億年もかけて作り上げたその造詣、そこにできた塔の形の不思議な魅力に取り付かれ、ついつい奥へ奥へと足を運んでしまった。

この Cavern は、とても長いトレイルがあり、丸一日かけてここに遊びにくる人が沢山いる。ここがとても人気のある場所であるのは、駐車場に止まっていた車の数の多さですぐ分かったが、感心したのは、これほどまでに洞穴を人気のあるものにしてている、その背景はなんなのだろうかということ。ここで手に入れた解説書によれば、なんと、ここは、National Park にな



まるで地下帝国の神殿を連想させてくれる

ってはいらもの、その運営は私的な非営利団体が運営しているとのことである。そして、その目的は、ここを訪れる人たちに、自然の作りあげたものに対する理解を深めてもらうこと、洞穴だけではなく、動物、植物などについても専門的な解説をし、理解してもら

うこととある。こうした努力は、あくまでも、将来、その知識を役立てて、また、自然の保護に携わってくれるような子供を教育するためである、と解説されている。確かに、アメリカの National Park や National Monument を訪問すると、非常に丁寧な説明がされているし、しかも、それが専門的なものであるにもかかわらず、子供たちにとっても分かりやすいような形に工夫されていることに感心する。こういう考えは、何でも商売に結び付けて、金儲けをしようという、どこかのこじき感覚の国の人たちには是非とも、考え直してほしいものである。

## Mc Donald 天文台へ

つつい遠まわしをし、しかも、少し熱が入りすぎて、予定の 30 分を大幅に超過。二時間程度の遅れで、次の目的地、McDonald 天文台に向かう。ここから三時間の行程だ。運がよければ、天文台が閉まる間際につくのではと、必死に車を飛ばす。途中で、写真など撮らさずに行けば、何とかなるだろう思いながらも、つつい、このチャンスを逸したら、もう二度と経験できないなどと思い、やっぱり写真を撮ってしまう。そのたびに一分、二分の停車となるのだ。でも、どうしても、行き途中でじっと我慢をして立ち寄りなかつた **Quadalupe National Park** には、車を止めることに。長いはずと、その展示をさっさと見て、このあたりの自然のでき方を勉強する。もう、これでいいだろうと、いよいよ McDonald 天文台へ。54 号線をまっすぐ南に下ることになる。ところが、ここでとんでもないことが。なんと、この 54 号線から東は、すでに **Central Time Zone** だというわけ。となると、三時半ころには到着する予定の McDonald 天文台は、どんなにうまくいっても、到着は、四時半ということになる。仕舞った。参った。でも、考えようによっては、天文台の仕事は、観光客相手ではなく、仕事は夜の仕事だから、なんとかなるだろう。最悪、ゲートが開いていれば、それでよい。と、今度はかつてに言いように決め手、腹を据える。

54 号から、一旦、インターステーツ I-10 にのり、**Kent** というところで、今度は、118 号線というカウンティハイウェイに入る。いわゆる田舎道である。ところが、このハイウェイの制限速度が 75 マイルなのである。曲がりくねってはいるし、センターライン



これが有名な **Hobby Eberly** 望遠鏡。

がある対面通行の道。それを 75 マイルで飛ばすのは緊張する。とにかく、テキサスでは、インターステーツが、80 マイルなのである。だから、普通 5 マイルオーバーで走っても、85 マイルのスピードだ。道路がまっすぐなうえに車の数が少ないから、これはまったく問題ないが、この、カウンティハイウェイを 75 マイル、5 マイルオーバーで 80 マイルで走る。自己責任とはいえ、これは、すこしひどすぎやしませんか・・・の気持ちはあるが、時間が残り少ないこちらは、これ幸いとばかり、必死に飛ばしたというわけ。こうして、起伏あり、カーブあり、時に、凍結注意などの看板をみながら、何とか、McDonald の天文台のある山に到着。ところが、これがいってびっくり。天文台は、もちろん山の頂上にあるのだが、その山の麓がこれがまた、広い高原になっていて、ここに実は沢山の人が働いているというわけ。

実は、この天文台は、Texas 大学の所属であるが、それとともに、星空の観察ツアーなどを大体的にやっていて、その面倒を見る人たちがここで生活しているというわけ。この日



107 インチの望遠鏡がすえつけられているドームの前で。

も、この星空観察に大勢の人たちが訪れていた。そのツアーが六時に始まるというわけだが、私の到着したのが、四時半。そんなわけで、ビジターセンターに入ると、夜のその星空観察のツアーに来たのかとたずねられた。ただの旅のついでにどうしてもここに寄りたくて、時間が遅くなったが、何とかいまここまで来ることができた。といったら、それなら、五時まで、自由に入ることのできる天文台は、ここだといって地図をくれた。こちらは土産ものも買いたいといったら

ら、今日は、六時からの星空観察があるから、ギフトショップは夜の 9 時まで開いているよといていた。それなら、明るいうちに観察ドームの前で記念写真がとれる、と必死であっちに山の上にあるドーム、こっちの山の上にあるドームと必死に走りまくった。おかげで、これで、McDonald 天文台訪問の快挙を成し遂げることができた。

この McDonald 天文台の夕方からの天体観測会に、次々の車が山に登ってくる。確かにこの日の天気は最高。と言っても、この辺りは、毎日が快晴なのだろう。こうした星空観測が盛んに行われているのは、ビジターセンターの繁盛ぶりをみたらよく分かる。夕食もできるようになっているし、また、宿泊施設も整っているようだ。そして、この観測会には沢山の親子ずれが参加していることはもちろんだが、なんと老夫婦で参加している人たちが

沢山いたことである。どんな思い出があるのか、あるいは、学生時代ここで、観測した恋人同士なのか、その数にびっくりしたほど。土産物屋である母親が子供に、ミニプラネタ



McDonald 天文台からの眺望。

リウムを買っていた。部屋を暗くして、星空を映し出すもので、私もほしかったが、ここは荷物になると自重したもの。子供のころからこんな風にして星空に興味を持てるということはうらやましい限り。ぜひ、将来は天文学者として活躍してもらいたいものだ。こちらは夕方、やや日の落ちかけた山道をくだったが、これとすれ違う車の量の多いこと。この時間にこの山に登ってくるのは、星空観察をする人たち意外に考えられない。それにしてもその数の多さ。正月のバケーションで家族

サービスなのか、本人の趣味からなのか、とにかく、McDonald 天文台の星空観測が人気のあることは確かだ。

## 17号線で見た、あの奇怪な岩は何なのだ。

McDonald 天文台から、この日の宿泊地に Fort Stockton へは、ハイウェイ 17号線を走る。Fort Davis という町をでい、しばらく走るとハイウェイは崖の切通しのようなところに差し掛かる。と、これがびっくり。両側の崖がまるで、あの有名なプライスカニオンの雰囲気。岩が立てに削られ、それこそ、何百という像がそこに立っているような状態。像の高さはブラススキャニオンほどはないが、岩が眼前に迫ってくるだけにその削られ方に力強さを感じる。何マイルも続くというわけではないが、この辺りの山のあちこちにこんな姿を見ることができる。まさしく、アメリカは行ったところにすばらしい自然の造詣品が鎮座しているという印象。驚きいりました。



まるで、ミニプライスカニオン

この日の行程

El Paso → Quaalupe National Park → Carlsbad Caverns National Park

→ Van Horn → Kent → McDonald Observatory → Fort Davis

→ Saraglsa → Fort Stockton

走った距離は、450 miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 十一日目 Dec. 31

### Fort Stockton to Fort Stockton

今日は、一日かけての Big Bend 探索。しかし、この Big Bend ほど、期待していたもの以上に感激を与えてくれたものはない。いたずらを越えたという表現をしたいくらいの自然の造詣の奇怪さに、びっくり仰天。驚きと、感激と、そして、自然の力の前に降参という一日であった。



Marfa の町の Court House 立派だ。

予定外の行動で、思いがけず時間をかけてしまった昨日の反省もあり、この日も、努めて早起き。でも、とにかく、朝が寒い。昼間は、かなり温度が上昇するが朝の冷え込みが厳しいのである。それでも、予定より、一時間早く出発ができた。この日は、Big Bend の National Park の、とりわけ、メキシコとの国境に沿って走ろうという試み。コースは、Fort Stockton から Alpine という町に向かう。67号線を南に下る。しかし、こ

のステーツハイウェイは制限速度が 75 マイル。テキサスは、広いだけに、田舎のハイウェイでもこんな調子。たぶん、長い距離を移動するには、おちおちしていたのでは、他の州にビジネスを取られてしまうというような感じ。でも、土地は有り余っている状態だから、ハイウェイは、数マイルまっすぐなんていうのは、当たり前。また、感心なことに、75 マイルで走っていても、この速度でカーブがちゃんと切れるように、道路が設計されている。

スピードの出しすぎで道をはみ出すようなことはないから、よくできている。プラス五マイルの原則でいくと、80 マイルで走るわけだから、これで、ドライブの行程が少し短縮できると、いい気になって走っている。でも、80 マイルというのは、130 キロくらいになる。このスピードで、ガードレールもない、対面通行の道を走るのだから、気を緩めることはできない。それに、Alpine から、なぜか、こんな田舎に University が、という町、Marfa に向かうあたりでは、風がものす



河岸段丘のように丘がハイウェイを囲んでいる

ごい。しかも、冷たい。暑くなると薄着で着て、震え上がっている状態。枯れ草が道路に

飛び込んでくるほどの風はハンドルを取られるほどだ。でも、スピードを落として走る車はいない。と言っても、前後一マイルくらいは私の車以外にいないのだが。こんな調子で、Marfa についたのは、予定より、30 分も早い。このゆとりがうれしい、なんて考えていたら、Big Bend に向かう 67 号線の脇に、170 は、閉鎖というような電子掲示板が出ていた。「ひょっとして、これは、私が計画している道ではないか?」と一瞬、頭に浮かぶ。通り過ぎて、そのまま行けば、何とかなるだろうというのが、普段だが、このときばかりは、もう一度引き返して、掲示板を確認。そして、地図をみると、やっぱり、私の選択したコースだ。



こんな形の山がハイウェイに迫ってくる

メキシコとの国境の町、presidio まで行き、そこから、Rio Grande に沿って Study Butte まで 170 の田舎道を走ろうというものだった。しかし、通行止めではどうしようもない。仕方なく、一度 Alpine まで、戻り、別のルート 118 号線を使い Big Bend に向かうことにした。というわけで、35 マイルを逆戻りというわけ。これで、朝の早起き分は、ご破算ということになった。でも、170 号を時間をかけて移動する分だけ、余分に Big Bend を楽しむことができる。そんなことを考えながら走った 118 号、これがまた、すばらしい景観道路。コースの右に左に奇怪な形をした山々が次々に現れてくると、たまらなくうれしくなる。このあたりは、独立峰の岩山が、大平原のなかに、この地は私が管轄しているのだといわんばかりに鎮座している。案内の でいた Santiago peak は、標高が 6525ft とある。2000 メートル級の山だ。このあたりの標高が 4000ft 程度としても、1000 メートル近くが、一気に空に向かってそそり立っているということになる。その姿の偉容さに、思わず感激。そんな山が次々に出現してくる。さまざまな形の山が出てくるたびに、走っている車の窓からカメラのシャッターを切る。道路が混んでいてはこんな芸当はとて



驚いたね、あの山の格好

できないが、後ろに車の来ていないことを何度も確認して、スピードを落としながら写真

をとるのである。少々センターラインのオーバーは多めに見てもらおう。こうして、**Big Bend National Park** にたどり着く。ここでも、年間を通して有効な **Annual Pass** を差し出すと、**Park Ranger** が、いかにも親しげに案内の地図をくれる。外人で、こんな **Pass** を使うのは滅多にいないのだろう。とにかく、アメリカの **National Park** に行こうと思うと



走りましたよ、このがたがた道。正面に **Santa Elena Canyon** が見える

約 20 キロとある。この間、孤独なドライブ。もし事故が起きたらどうしようもない状態で、少し緊張の面持ち。道が悪いので、スピードを落とすのだが、実は、こういう道は、下手にスピードを落とすより、思い切って早く走るほうが振動は少ないのだ。ただし、早すぎるとブレーキが利かない。小石の道では、石とともに滑ってしまうのだ。少々、荒っぽいけど、40 マイルで走る。舗装道路なら、このスピードは徐行ということになるが、ここでは、振動に耐えながらの走りで、かなりスピード感はある。それもそのはず、40 マイルは、 $\text{km}$  に直せば、60  $\text{km}$  は出ているのである。道は険しかったが、周りの景色はすばらしい。とりわけ、国境の対岸にあたる **Santa Elena Canyon** が近づくとつれ、これに続く **Bluff** の険しくも、雄大な姿が間近に迫ってきて、これが、ものすごい迫力なのだ。感心しながら、たどり着いたところは、まさしく、高さは何百メートルもあろうかという **Canyon**。

メキシコは、川の対岸。誰でもすぐに渡れるような川だ。が、渡ったところで、あの崖を上らなければ、メキシコに行ったことにはならないだろう。

何日もかけて、自分で車で行かなければならないから、なかなかの重労働になるというわけ。そんなことから、この **Pass** をもっているだけでも価値があることが理解できる。もらった地図で、公園のなかの予定を再確認しようと、たまたまわき道に車を入れたら、そこがなんと、**Old Maverick Road** の入り口になっていた。この道、未舗装であるが、**Rio Grand** に行く一番の近道である。というわけで、時間のゆとりもあることから、この道に挑戦。もちろん、私のほかには走っている車はいない。



**Santa Elena Canyon** の前で。この迫力



次々に見せる奇怪な岩山。  
機会があったら是非どうぞ

る Panther Junction に向かうが、この道の周りがまたすごい。次から次へと異様な形をした岩山が、今度は私が、次は、この俺だといわんばかりに差し迫ってくる。Cerro Castellan (3,293ft), Mule Ears Peaks(3,881ft)。この岩山は、まさに耳が二つあるようにツインの岩山なのである。不思議なものだといえば、とにかく見ていただくよりほか説明の仕様がかない。そして、

Dominguez Mountain (5,156ft), Elephant Tusk (5,249ft), Goat Mountain, Emory Peak( 7,825ft) , Casa Grande (7,325), Lost Mine Peak (7,550ft) などのピークがその顔をのぞかせるが、それぞれに特徴のある形をしている。

そして、今度は、もうひとつのメキシコとの接点となっている Rio Grande Village に向かう。ここも、Boquillas Canyon という、崖がメキシコ側に聳え立っている。といっても、メキシコ側からすれば、この地点しかアクセスできないほど、ほかの場所の崖が凄いということ。

ここにも、アメリカ人が沢山訪問していたが、とにかく公園が大きいので、どこに行くにも、自分ひとりか、ほかに、後続の車がちらほらという感じ。それなのに、Rio Grande Village には、数え切れないほどの RV 車が止まっていた。なんと、ここには、生活用品を販売しているお店まである。確かに、アメリカ人はこうした峡谷でラフティングなどの遊びをすることよくあるが、その数からして、この RV 車でここに来ている人たちは、本当に只、行楽というだけで来ているのだろうかとすこし疑いの思いであった。





**Rio Grande Village** で。向こうはメキシコ

こはなんとって、アメリカの南端なのだ。

**Big Bend** で、もうメキシコの雰囲気を感じ、今度は 385 号沿いに **Fort Stockton** にもどった。しかし、この 385 がまたすごい。すばらしい雰囲気。見てください。右の道路。自分の走っているその先が写真の真ん中あたりにくねって見えるのが分かりますか。こんな景色をみていると、もう鼻歌が自然と出てきますよ。まさしく「テキサス決死隊」って雰囲気です。そして、この道からも、次々に変わる **Big Bends** の山々を楽しむことができます。

かと、思えば、なんとピラミッドのような格好をした山がいくつも出てくる。大して山は

なんと、ここで、コーンハスカーの旗をなびかせて走っている車を見つけた。あわてて、車に駆け寄り、ネブラスカから来たのかと聞いたら、そのとおりという。私もだどたちまち意気投合。それにしても、その車に乗っていたのは、私より、10 ぐらい年長ではないかと思うような老夫婦。うらやましいというか、よくやるよというか、大丈夫かねという心配までしてあげる始末。でも、うれしいね。こんなところ、つまり、こ



**Big Bends** の帰り。すばらしい景色が続く、385 号



**Big Bends** には、奇怪な形をした山、山、山。また、いや、まあ一驚いた。

高くはないが、よくもあれだけきれいな三角の山ができたものだ。ひとつや二つではないから、なにか理由があるに違いない。

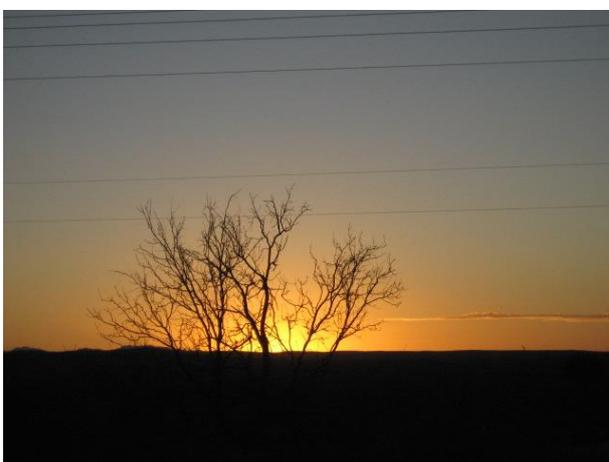
ここの **Big Bend** ほど、期待したもの以上に感激を与えてくれた **National Park** はほかにはないのではないかと思う。とにかく、自然の造詣の深さ、そして、それが、次々と違った形で目の前に出現してくるのだから、ドライブをしていてこんなに楽しいことはない。こうした **National Park** は、ここに何日も滞在して、自然とともに



えっ。アメリカにもピラミッドが。

に生活することがしの真髄であるように思うが、それができないことをうらやましいと思うより、自分なりの楽しみかたができたことにこの **National Park** に本当にお礼を言いたい気分だ。

感激ひとしおの気持ちで夕焼けの山々のシルエットを見ながら、宿泊地 **Fort Stockton** に向かう。大平原のテキサスも、夕日がなかなか見事だ。「流石テキサス」の言葉が仕切りに出る。



誰が撮ったって？ それは、私です。お見事。

この日の行程

Fort Stockton → Alpine → Morfa → Alpine

Study Butte → Castolon → Headquarter → Rio Grande Village

→ Headquarter → Marathon → Fort Stockton

走った距離は、443 マイルでした

## 何かありそなアリゾナ紀行 十二日目 Jan. 01

### Fort Stockton to San Angelo

新年、おめでとうございます。今年も、旅の途中で新しい年を迎えることになりました。なんてたって、この経験は、誰でもできるわけではありませんので、すこしこだわりを持ってドライブしているわけです。

いまは、アメリカの南部探索。メキシコとの国境あたりを好きなだけドライブというわけ。今日は、Rio Grande のうちの Del Rio まで行き、この町の近くにある、Alamo Village



アメリカ版初日の出。地球の夜明けです。

を尋ねるよてい。これが今回の旅の最終目的地。そのあとは、只ひたすらネブラスカに帰ることになります。つまり、いよいよ帰路につくというわけ。

少々、走行距離が長くなりそうなので、例によりはや立ちと決めた。この日は、東に向かって移動することになり、朝の太陽がまぶしいドライブを強いられそう。

でも、できるだけはや立ちすれば、太陽光線がまぶしい時間を少しでも少なくできるだろうとの計算。Fort

Stockton から、まだ夜明け前のハイウェイ 285 を 75 マイルで飛ばす。地図には少々の曲がりはあるが実際に運転すると、3 マイル、5 マイルがまったくの直線道路。この間が手持ち無沙汰というほど。そこで、ついつい、写真を撮りたくなったりする。しかも、ちょうど、車の前方に朝日が昇ってくるという設定だ。地平線に沈む夕日は何度か経験したが、地平線から昇ってくる朝日はなかなかめぐり合う機会がない。というわけで、何とか、傑作は取れないものかと必死になる。運転しながらのこのシャッターチャンスはなかなか難しい。対向車と、それから、後続の車がないことをよいことに、好きなときに好きなだけ車をハイウェイに止めてシャッターチャンスを狙



Rio Grande の川が直ぐそこを流れています。

う。こうして、何枚かの写真を撮ったが果たして、満足のいくものが撮れたらどうか、楽しみだ。

こんな楽しみ方ができるのは、やっぱりアメリカの土地の広さのおかげという言い様がない。何しろ、邪魔者がいないのだから。其れだけ土地が広いし、人が少ないのだ。

朝日が昇るとやはり、これはまぶしい。まったく前方が見えなくなる角度になることがあるが、それでも、時速 60 マイルで走る。前の車が急停車していたら、間違いなく、追突する。しかし、アメリカの車はけっして前の車は止まらなると確信している。としかいえないほど、車間距離をとらずに走っている。時速 70 マイルで、車間距離が数メートルなんと信じられますか。でも、現実はそのなんです。

Sanderson という町からは、90 号線に乗る。このハイウェイが Rio Grande つまり、アメリカとメキシコの国境を流れる川なのだが、これに沿ってアメリカの一番南を走っているのだ。国境までは、まだ、数マイルくらいあるのであろうか。とおくにメキシコの山々



この水の青さは何かある。それほど、真っ青。

め湖の豊富な水を見ると、なんとなくここで生活することも可能なのだという実感が湧いてくる。しかし、それにしても、この堰きとめ湖の水の青さにびっくり。ユタ湖やコロラドの川の水は緑かかっていたし、また、アイダホあたりで見た湖は、なんとなく塩の濃度が高いことを想像させるような、やや白っぽい感じの水であった。ところが、この Del Rio にある湖の水は、真っ青そのもの。澄み切った冬の空と同じブルーだ。なぜ、こんな色になるのか不思議でならない。しかし、一昨日の Douglas の町の近くにあった、Bisbee の町のブルーの石のことが直ぐに頭に浮かぶ。このあたりの鉱石になにか特徴があるのではなかろうか。一度、詳しく調べてみたい。

国境の町、Del Rio から、Alamo Village のある Brackettville に向かう。ここにある Alamo Village というのは、西部劇の映画のセットなのだ。だだっ広い大平原のなかにポツンとセ

が見える。テキサス州のこの辺りも農場どころか、牧場さえないような場所。とにかく、草が生えないのだ。そんな荒れた土地はメキシコ側でも同じではなかろうか。そんな思いをしながら、とおく、メキシコの山々を望んでドライブをする。

Del Rio の町に着く直前に堰きとめ湖がある。このあたりでは、川はあっても水が流れていないというのが常識。この時期、Rio Grande すら水の量はごくごくわずかなのである。だから、堰きと



笑われましたけど、こんな気持ちでした。

を利用して撮影されたとのこと。  
それにしても、ここにあった土産物の安いこと。たぶん、インディアングッズは、アメリカ中のなかで一番安いのではなかろうか。そんなことからつい気が緩み、沢山の土産を買い込んでしまった。でも、念願の羽飾りは買えなし、安い分だけ得をしたような気になるから、人間なんて身勝手、そのものだ。

この土産物屋のカウンターにいた女性。若くて顔にはにきびが一杯。でも、とても、愛嬌があり、親切で、つい、気が緩んで沢山の買い物をしてしまふ、そんな雰囲気があった。ここには、2軒の土産物屋があるが、これは、映画のセットの家の中にある。狭いので2軒に分けているのか、両方の土産物屋がまったく違ったものを売っていた。もう一方のお店のカウンターにはすこし年配の人がいて、私にいろいろなことを訪ねてきた。どこをドライブしてきたのかと聞いてくるので、アメリカの南部をドライブして回っているのだ。昨日は、Big Bends に言ったが、ここは、「期待以上の見ごたえがあるということでは、アメリカーだね。」といったら、大いに喜んでした。みんな自分の州のことをほめられると本当に嬉しそうだ。アメリカのことよりもまずは自分の州といったところか。どうも、後から考えたら、この2軒の土産物屋にいたのは、親子ではなかろうかと思う。そんな雰囲気の二人であった。

ット、と言っても、ひとつは Alamo の砦を再現したもの。そして、もうひとつは、西部の町を再現したものである。酒場とホテルと銀行と、マーシャルのオフィス、加治屋と、ステージコーチの保管場所、西部劇にはお馴染みの町がそのまま再現されている。周りの牧場のことも考えれば、ここが世界一のセットであることに異論はない。ジョン・ウェインの映画を始め、1950 年台から、2000 年まで、それはもう沢山の映画をここのセット



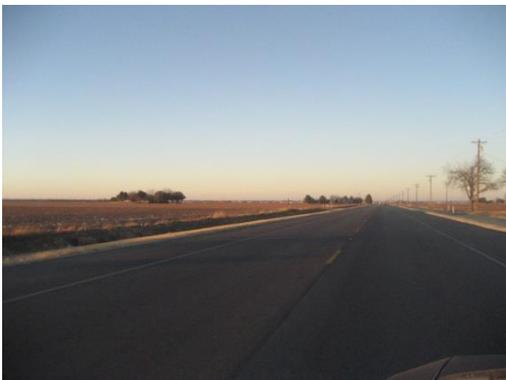
荒野の町を思わせる映画のセットです。



とにかくテキサスは、意外な発見ばかり。

結局、この道は、Alamo Village を尋ねてくる人が沢山いること、そして、田舎道だから、結構スピードを出して運転するという事ではないでしょうか。私が運転する田舎道、私の車以外、前にも後にも数マイルは車がないというところでは、パトカーも商売にならないのでしょうか。

こんな田舎道でも、途中からちょっとした溪谷の上をはしる。広々とした展望が開け、思わず写真を撮りたくなる。ところが、不思議なことにここにテキサスといえば当然、綿の産地として有名ですから、開かれた農場には綿畑があるはずですが、それが、今回、ドライブをしていた、テキサスの西のほうには、この綿畑が皆目目につきませんでした。ところが、この日の宿のある San Angelo までくると、突然、冬枯れした畑に、白い綿が沢山見えたのです。このあたりを境に、山のテキサスと平野のテキサスがあるのではないのでしょうか。とにかくテキサスは大きい。なんと面積は、日本の二倍近くある。人口密度が、32 人/平方キロ、日本が 320 人/平方キロ。実に十分の一。といったって、ほとんどが平原だから、実感は、三十分の一もないのではないかと。そして、開けているのは、東の半分



やっと綿畑を発見。San Angelo 郊外

つつい、沢山の土産物を手にし、後で開くのが楽しみだ。ここもセットかと思うような牧場が延々と続く、674 号の狭いハイウェイを 60 マイルで走る。制限速度は 55 マイルである。とにかく、田舎道ではあるので、パトカーなどいないだろうというのが、浅はかな先入観。実は、いるんです。この田舎道の両脇は灌木になっているのですが、ここに、パトカーが、しかも、二台も隠れていたんです。

今回は、とりわけスピードには注意をしてドライブを続けているんですが、



こちらは見事な農園でした。

だけ。西の半分はほとんどまだ、未開と言っていいくらいの荒野だ。勝手はこの地を支配していたメキシコ・スペインも金が出なければ、あまり興味を示さなかったテキサス。自然がそのまま残されているという、とても魅力あるところだという気がした。

この日の行程

Fort Stockton → Sanderson → Langtry → Del Rio →

Brackettville → Alamo Village → Rocksprings →

Sonora → San Angelo

走った距離は、417 マイルでした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 十三日目 Jan. 02

### San Angelo to El Reno

この長いドライブ旅行もあとは、只ひたすら北に向かって走る最後の行程になりました。これだけ、沢山の刺激を満喫したのだから、なんとしても無事ネブラスカに帰らなくては、少しでも、はや立ちし、日のあるうちに宿につくよう心がけた。とにかく、毎日、400 マイルくらい走ることになるが、これが、ほとんど、北への移動であるから、日本で言えば、鹿児島島の緯度から東京に移り、そのあと、盛岡あたりまで、二日で移動しようというわけである。20℃くらいのところから、マイナスの地方に行くのだから、いかに体を慣らすかに気を使う。



Sam Angelo で見た教会。立派だ。

宿泊地の San Angelo は、Dallas より南にあるのだが、実は、テキサスの西のほうは意外と標高が高く、毎朝零度以下まで気温が下がる。このたびの間中、ほとんど毎朝、車には霜が降りていたほどだから、アメリカの南部が暖かいといっても、それは、テキサスの東部からフロリダにかけてのはなし。西の方は、やっぱり冬

なのである。El Paso の標高が 3762ft, そして、Midland でも、3000ft 近くある。つまり、平

野と言っても高原の世界なのだ。雨が少ないから、朝は冷えても、昼間は気温がぐんぐん上がるというわけ。これが、大荒野の広がるテキサスの現実なのである。さてさて、あれだけ広い平野がありながら、たまに牧場があるくらいで、ほとんど自然のまま。土地が利用されていないといいたくなるほど、とにかく荒れ果てた世界だ。こんなところで、隣の家までが数マイルもあるようなところで生活をしている人たちの人生感でどんなものだろうと、ついつい、余分な節介を考えてしまう。

とにかく隣町までの距離が長く、ハイウェイはどこまでもまっすぐ、ということになると、退屈で眠くなるのが一番の問題とお思いかも知れないが、なにも変化のない景色でも、次々に変わる木の種類や、サボテンの形、そして、遠くの山の変化を見ていると、それほど退屈することはない。それよりも困ったのは、いわゆる Service Area、こちらでは Picnic Area とい



テキサスのハイウェイは立派だが、トイレがない。



ハイウェイ脇の粹な住宅。

うが、テキサスでは、ここにトイレがないのだ。となると残る手段は、観光地の **Visitor Center** によるか、ガスターションを頼りにするしかない。もちろん、ガスターションは、何十マイルもはなれてあるわけだから、テキサス、とりわけ、西部を旅行するときには心がけなくてはならない深刻な問題だ。

テキサスを離れるとなると、テキサスのことについて気のついたことをまとめておかなくてはと思い、思い出しながらハンドルを握った。とにかく、テキサ

スは、広く、そして、乾燥している。朝晩の冷え込みがきついことも、この土地の特徴。道路がまっすぐで、平坦なので、ついついスピードを出しすぎになる。普通のハイウェイでも、制限速度が、75 マイル、遅いところで 70 マイル。そこで、注意しなくてはいけないのが、たとえば、ハイウェイ 80 号を走るとき。道路の標識を間違えて、スピード制限と思い込んでしまいます。ついつい、80 マイルを出してしまうというわけ。テキサスなら、これくらいで走ることも珍しくないからだ。

それに、太陽がやたらとまぶしい。紫外線が強いのだと思う。サングラスは必需品。行きの行程でアリゾナを走っているときに普段使用しているサングラスが分からなくなり、途中で新しいものを購入はした。これが、朝晩のやや暗くなったときでもよく見えるもので、それに支払った金額だけのことはあった。サングラスは、少々、値が張ってもテキサスを走るときには上等なものもいいかもしれない。



テキサスは石油の産地としても恩恵を受けている。

そんなことを考えながら、テキサスとオクラホマの州境にある **Wichita Fall** に着く。この町は、以前に立ち寄ったことがある。そのときに **Visitor Center** で、とても親切にしてもらった記憶があるので、何とかして、ここによろうと、ハイウェイからおりて、町のかなかを走る。しかし、知らない町はナビがあっても、なかなか苦戦。あきらめて、再びハイウェイに乗ろうとしたら、そこに案内板があった。こんなハプニングがあったが、無事、このビジターセンターによることができた。この日も、ボランティアでここでサービスをしているおばさん、とても愛嬌がいい。この笑顔で迎えられると旅が楽しくなるというも

の。日本でも何とか、こんなサービスをしてもらいたいものだ。とにかく、アメリカでは、他の州から自分の州を訪ねてきてくれた人を、本当に心から歓迎しているという気がする。

そして、オクラホマに入る。この日は移動だけ。天気もよく、テキサスを走りぬけ、いい気持ちでいたら、なんと、前方の空に黒い雲がかかっている。天気予報では、ここがス



ノーストームなどということは言っていないなかったはずだ。これは、おかしいと思いながら、走っていると、直ぐに、もやの中を走っているような状況になる。ひょっとするとオクラホマは雪かなという懸念が湧いてくる。もう、冬將軍の試練か、と観念。それでも、雪になる前に少しでも北に走ろう。ところが、ところが、このもや、数十マイルも走ったら、なんと、また、青空なのだ。つまり、ここが雲の流れ道だったようだ。さすが、アメリカ。一日のうちにこれだけの変

突然、前方はすごい霧。この先が心配……。

化があるのだから。何でもそうだが、アメリカはこうだ、などと一口でいうことの難しさ、おろかさを体験させられた感じである。

こんな調子で、この日は、無事オクラホマの近くにある、El Reno の町にたどり着いた。

この日の行程

San Angelo → Abilene → Wichita Falls → Lawton →

Anadarko → Chickasha → El Reno

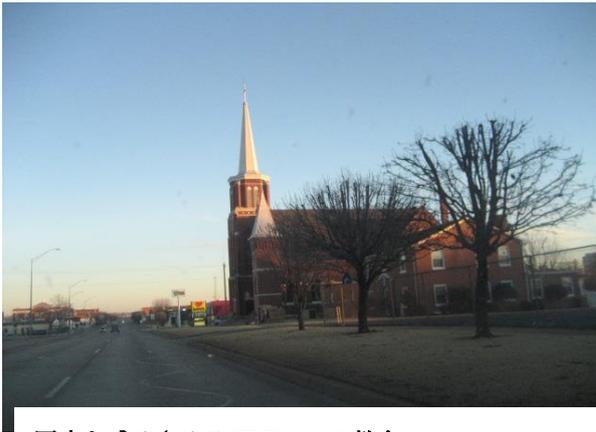
走って距離は、402 Miles でした。

## 何かありそなアリゾナ紀行 十四日目 Jan. 03

### El Reno to Lincoln

いよいよ最終日です。

オクラホマからリンカーンまで、一日の行程ではかなりの距離ですが、この日はほとんど見学する予定はないので、すこし朝早く立てば、十分走れる距離。ただし、それも天候しだいでしたが、朝、おきてみると上々の天気。これなら、インターステーツを走る必要は



歴史を感じさせる El Reno の教会。

ないと、El Reno から Oklahoma City に行くのではなく、このまま北上、ステーツハイウェイを走ることにした。時間によっては、東に向かうと朝日がまともに目に入るし、できるだけ、日の低いうちは北に向かおうという作戦である。最初は Kingfisher というところから東に向かう予定でいたが、まだ時間的には朝日が目に入る。そこで、さらに北の Enid まで、ハイウェイ 81 号を走る。このあたり、オクラホマの農場が広がる豊かな平原。

テキサスと比べれば、本当に自然の恵みの差を感じず。しかも、農場のなかに石油が出るのだ。このあたりのすこし大きな町になると、ちょっとした石油の精製工場がある。Enid には、以前、宿泊したことがあるが、ここには、かなりの大きな製油所があるし、さらに東に行けば、Ponca City は、大製油所がある。石油の価格が下がり、いまだんな状態かなと思うが、ポンプはそんな景気のことなどにはかまわず、相変わらず首を立てに振っている。

Enid の町にナビをあわせて、初めて分かったが、ナビで都市の名前で入れると案内はちょうど、その都市の支庁のあるところを目標にしていることがはじめて分かった。この町に以前に来たことがあるので、いったいどこまで案内してくれるのかなと注意をしていたら、いつも自分が田舎の町に行ったらその歴史を知るために、コートハウスを見たいと思っていた。そのコートハウスがあるのは、町の一番歴史が古い場所、つまり、支庁のあるあたりだ。だから、これまでも、ナビどおりに行って、たまたま、コートハウスを見つけることがあったが、これで納得。これなら、もっと大きな町でも容易にコートハウスが見付けられたというわけ。もう少し早く気が着けばよかつ



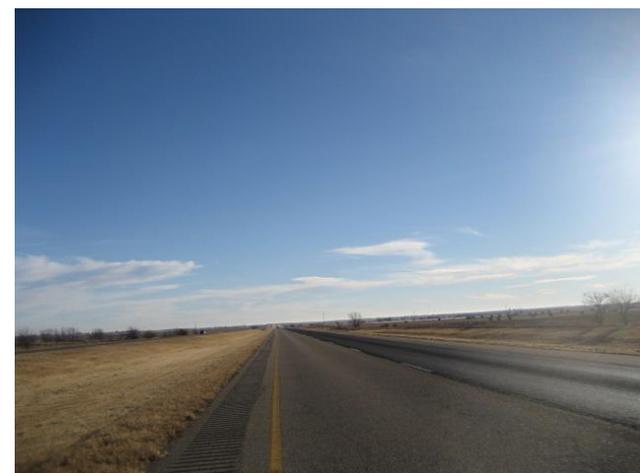
この辺り、石油の産地なのだ。

た。後の祭りとはよく言ったものだ。

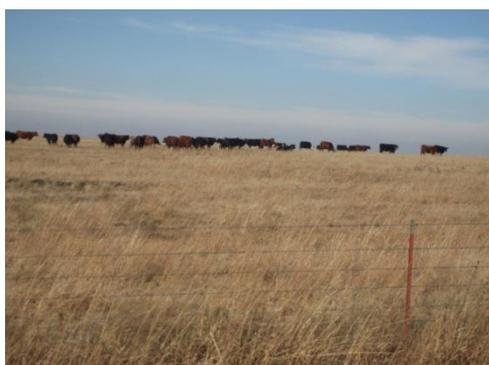
その Enid から、インタースターツまでのハイウェイ 64 号は、30 マイルほどであるが、これがまた、まさしくまっすぐという言葉どおり。しかも、ここは平原のど真ん中。これだけ変化の乏しいハイウェイもほかにはないだろう。退屈しのぎになにかをしなくては、時間が持たない感じだ。

インターステーツ 35 に入れば、いよいよカンザスだ。天気はいい。カンザスからは、まっすぐ北上する予定だったが、

これだけ天気がよいのであれば、すこし、カウンティハイウェイを走ろうと、Wichita からそのままターンパイクを Cassoday という町まで行き、底から、177 号線を北に向かうことにした。ここは、以前には北から南に向かって走ったことがあるが、カンザスの代表的な大平原、Tallgrass Prairie がある。ここを今度は南から北に向かって走ろうというわけである。つまり、ここはかつてテキサスからカウボーイが牛を



どこまで続くの、このまっすぐな道路

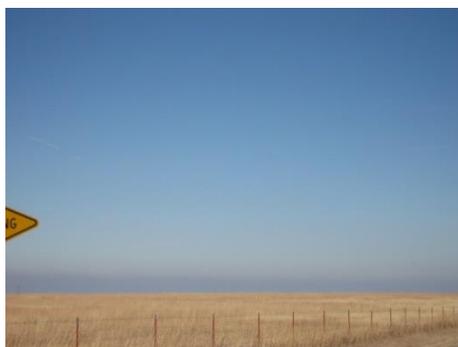


牛たちもきっと退屈してますよ。

というより、もともと北のほうは曇りであったようだ。だから北に行くに従い、その曇り域に入ってきたというわけ。最初は 57° F の外気温が、瞬く間に 10° 下がっている。しかし、まだ、凍りつくような気温ではない。何とか持つことを願いつつ、インターステーツ 70 を横切る。ここからネブラスカまで 70miles ある。と そのうち、フロントガラスに水滴らしきものが出てきた。ただ、まだそんなに大きなものではない。これなら大丈夫と思って走っているうちに、これがだんだん大きくなってきた。一番心配していた、フリーズドレインになる可能性がある。これは、気温がマイナス 5°C くらいのときに上空で

追いかけて旅を続けたトレイルなのだ。その当時のことを思い浮かべながら、いい気になってここを走る。

だが、そのいい気分がそのあと、大変な苦勞になった。その大平原のどまんなか、Council Grove という町のあたりで、この分なら、ネブラスカまで大丈夫かなと思っていた天気が俄かに変わってきた。



Tallgrass Prairie 草以外になにもない

雨であったものが、気温の低い大地で急に凍るもの。これだと、道路はまるでスケートリ



**Council Grove の Court House**

ンク状態。車はまともに走れない。少しの坂道でもハンドルを取られて制御が利かなくなる。

**Manhattan** の町を過ぎたところからいいよこれが怪しげ。窓ガラスについた水滴をワイパーでこすると、ガリガリという音がする。水滴が凍っているのだ。周りの車も慎重に走っているのもいるが、こんななかで、スピードを一向に落とさないのがピックアップトラック。確かに彼らの車がはいて

いるタイヤは、ものすごい幅広。しかも、トラックが重いから少々ではスリップしないのだ。ところ

ろがスリップをして止まらないのもこのトラック。よくもあんなにスピードが出せるな、

あれば事故を起こせば、巻き添えを食らったほうはたまったものではない。そんなことを考えながら、両腕で握るハンドルに力が入るから、たちまち肩が凝ってしまう。この霧雨状態は、それからずっと続き、ネブラスカに入ってもまだ、道路状況がよくない。ただ、ラッキーなことに、カンザスからネブラスカにかけては、坂は全般に上り坂。つまり、ネブラスカに行くにしたがい、丘になっている



**Museum** でも、何でもありません。普通の住宅です。

のだ。スピードを出して後についてくる車には、先を譲り、前から来る車にはカーブでは

すれ違わないように注意をしながら、なんとか、ネブラスカの **Beatrice** に到着。ここまで来れば、あとリンカーンまでわずか。ここで、もう一度、気を引き締めて二車線の



走行車線をゆっくりゆっくり走る。ありがたいことに、ネブラスカのほうが気温が低いのに、霧の量は少ないと見え、道路は意外と乾いていた。でも、油断は禁物。まあ、ここまでくれば、後は、ゆっくりはしっても今日中にリンカーンには着く。このゆとりで安全運転。おかげで、少々遅れはあったが、無事、沢山の思い出、土産、そして、新しい発見を車一杯に積んで、懐かしのアパートにたどり着いた。

またしても、氷の恐怖。

よくも走りぬきましたその距離、メーターは、5,651 マイルとでていました。\*ににして、9041 キロでした。北海

道の稚内から、鹿児島指宿まで、JRで、大体2,300<sup>km</sup>。ということは、ここを往復したことになります。よくやりました。なぜ、ここまでやるのか、僕には、わかんない。

この日の行程

El Reno → Enid → Wichita → Cassoday →

Strong City → Council Grove → Manhattan →

Merryville → Beatrice → Lincoln

走った距離は、454 miles でした。